

第3章

協会が派遣した 災害支援ボランティア

■ ■ ■ ■ ■

1. ボランティア派遣の方法と実態

今般の東日本大震災に直面して協会は、そのつどの必要や要請に応じ、様々な形で災害支援ボランティアを募集し、被災地に派遣した。ボランティア派遣のあり方で大別すると、①被災地の都道府県作業療法士会が行う災害支援活動の協力者として派遣する場合（岩手県作業療法士会、宮城県作業療法士会）、②協会が直轄で行う災害支援活動の実行者として派遣する場合（福島県南相馬市、岩手県岩泉町）、③他団体等が行う災害支援活動の協力者として派遣する場合（生活機能対応専門職チーム、日本発達障害ネットワーク）などがあつた。本項においては、第1節で協会が行ったボランティア派遣の方法をこの3つの形態に即して解説するとともに、第2節でボランティア派遣の実態を、派遣先、人数、その他の特色を交えながら時系列的に示す。

1) ボランティア派遣の方法

(1) 士会が行う災害支援活動にボランティアを派遣する場合

災害が起こった地域の都道府県作業療法士会が、その士会の事業として災害支援活動を行うにあたって、要員の補給・補助という形で協会がボランティアを派遣する場合である。支援活動の主体はあくまでも被災地の士会であり、協会はその後方支援者に過ぎず、派遣されたボランティアは士会活動の傘下に入ることになる。協会が災害支援ボランティアの派遣を決定した際にまずその念頭にあり、今後また大規模災害が起こった際にもやはり基本的になると考えられるのがこの派遣形態である（図1）。

①ボランティア登録

当協会のホームページおよび会報「日本作業療法士協会ニュース」にボランティア募集の案内を掲載。ボランティア希望者は、専用メールアドレス（ot_volunteer@yahoo.co.jp）に会員番号、氏名、連絡先（郵便番号、住所、所属施設、電話番号、FAX番号、携帯電話番号、PCメールアドレス、携帯メールアドレス）、専門領域（3つまで）、派遣可能時期、派遣可能期間、自動車（運転の可・不可、自家用車使用の可・不可）、公文書（要・不要、施設長名）等々のデータを送信。派遣者同士の連絡調整目的で個人情報共有することについて同意する・しないについても確認。事務局担当者がそれらを随時一覧表にして登録。

②ボランティアの派遣要請

被災地の県士会が、現地での支援活動の進行状況を勘案しながら、必要に応じて協会にボランティアの派遣を要請。具体的には、県士会のボランティア・コーディネーターが、いつ、どれくらいの期

間、つど何名のボランティアが必要か等の条件を指定して、協会事務局担当者に連絡。

③派遣の案内

協会事務局担当者は、ボランティア登録者に対し、②の派遣要請を電子メールで配信。派遣開始初期は、登録時の希望（派遣の時期や日数等）に合致した派遣者のみに案内を発信したが、希望内容が流動的であつたり、調整可能な幅があつたりすることから、途中からは登録者全員に派遣要請を配信するようになった。

④相互調整～派遣者決定

派遣要請を受け、そこに指定された条件で実際に派遣を希望する登録者が、その旨を協会事務局に返信。事務局担当者は、士会から要請を受けた日程と人数が埋まるように種々調整。例えば、人数が集中して定員オーバーしている日程から人数が足りていない日程への移動、それでも人数が不足している日程については登録者に対して再度案内を配信、また必要に応じて自動車運転ができる人とできない人との組み合わせ、同性どうしの組み合わせ、等々、種々の調整を経て派遣者を決定し、登録者に派遣決定した旨を通知。

⑤派遣者リストの通知

指定された日程の派遣者が決定したら、派遣者リストを県士会の現地コーディネーターに送信。

⑥支援活動に関する打合せ・連絡調整

派遣者リストを基に、現地コーディネーターが派遣ボランティアにメールその他で直接コンタクトをとり、現地集合の時間や要領、宿泊や持ち物、支援活動に関するスケジュール等々の詳細について連絡。

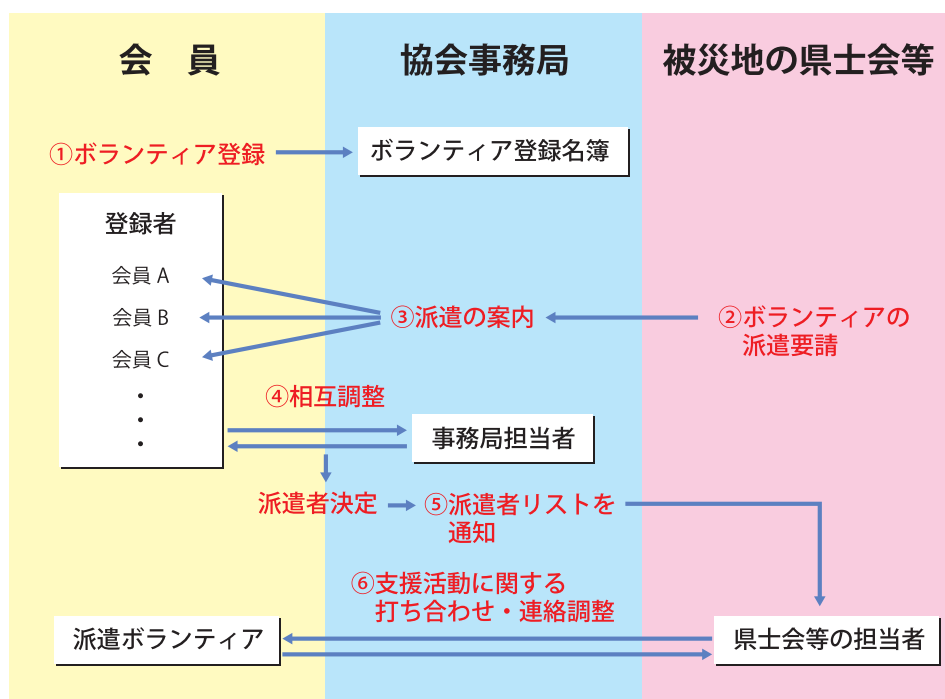


図1 士会が行う災害支援活動にボランティアを派遣する場合の流れ

(2) 協会が直轄で行う災害支援活動にボランティアを派遣する場合

災害が起こった地域の都道府県作業療法士会がさまざまな事情により災害支援活動を行えない状況にあるとき、あるいはその士会が行う災害支援活動では対象範囲にできないが作業療法士による支援が必要と考えられる地域があるときなどに、その士会の要請を受け、あるいは協会単独の判断に基づいて、協会が被災地に直接ボランティアを派遣する場合である。協会が支援活動の主体となるので、(実際にはその士会や現地の士会員から有形・無形の支援を受けながらではあるが)被災現場の状況把握、現地でのコーディネートや支援活動の申し送り、宿泊場所等の拠点の確保などを、現地の様子がよくわからない中であっても協会が自立して行う必要があり、それが原則となる。今般の東日本大震災においては福島県南相馬市や岩手県岩泉町への支援活動がそれに該当するので、この2つの事例において具体的にどのような準備を行い、どのようにボランティアを派遣したかを報告する。今後の災害に向けても、一部この派遣形態を想定した準備態勢を整えておく必要がある。

◆福島県南相馬市への派遣方法

福島県作業療法士会からの要請に基づき、協会が直轄でボランティア派遣を行うことになった。当時南相馬市には保健センターに作業療法士が1名おり、その方に現地の仲介役となっていて支援活動を行うことになったが、支援活動自体の遂行、活動の申し送り、宿泊施設の準備などは協会側で自立し

て行う必要があった。

そこで支援活動を開始するに先立って、まず宿泊施設とレンタカーの手配を行った。南相馬市内の交通至便な場所に1DKのアパートを協会名義で借り、必要な家具類(寝具、こたつ、調理器具・食器類、食料品、入浴用品、掃除用具、線量計など)を購入。支援活動に使用するレンタカーは、地元のレンタカー店と交渉し、やはり協会名義で1ヶ月単位でレンタカーを借り入れ、アパートの駐車場に置くこととした。

また、支援活動の申し送りは、宿泊施設に申し送りシートのファイルと覚書用のノートを置いて情報共有が図れるようにするとともに、前後のボランティア同士で連絡を取り合って、可能であれば現地(宿泊施設)で顔を合わせて引き継ぎができるよう、双方の連絡先(氏名、年齢、携帯電話、電子メールのアドレス等)を事前に伝えておくこととした。

ボランティア派遣までの流れは、(1)の①で登録していただいていた方々に対して、協会の連絡調整室から派遣条件等の案内を電子メールで配信し、希望者を募って順次調整を行った。活動期間は平均1週間単位で設定し、各期間原則2名ずつの派遣者を決定していった。宿泊施設が1室であったため、派遣者は同性どうしの組み合わせとする必要があった。

◆岩手県岩泉町への派遣方法

岩手県が県下各市町村に、東日本大震災津波による被災者生活支援事業費補助金交付要綱に定めた事業である「高齢者の新たな生きがい創造事業」の実施を募ったところ、岩泉町が手を挙げ、当初はその

協力を岩手県作業療法士会に照会してきたが、県士会としてはすでに別の地区の被災地支援を継続中であつたため、当協会が代わって受託することとし、岩泉町との間で委託契約を交わした上で、ボランティア派遣を行うことになったものである。

この支援活動は、協会が契約主体となつて受託した事業であつたことから、当初から協会理事が岩泉町との交渉に関わつた。実際の支援活動を開始するのに先立って数回現地を訪問し、仮設団地の自治会長等自治会のリーダー、岩泉町の保健師等との打合せを行った。また事業の性質上、対象者との継続的な関係づくりが重要であつたことから、ボランティアは数度にわたって派遣することを条件に4~5名の固定メンバーを協会が選定して派遣することとなつた。現地での宿泊には、すでに営業を再開している宿泊施設（旅館等）を利用した。

(3) 他団体等が行う災害支援活動にボランティアを派遣する場合

基本的には(1)の「士会が行う災害支援活動にボランティアを派遣する場合」と同じ流れでボランティアの登録、募集案内、選定、派遣支援等を行うが、活動の主体となっている団体が指定する諸条件によって、人選の仕方、必要な提出書類などが異なってくる。例えば、他職種とチームを組んで宿泊・活動する関係上性別が指定されたり、旅費を負担する予算の関係上ボランティアの在住地域が限定されたり、専門領域が限定されたり、一定の経験年数が求められたりする場合もある。

日本発達障害ネットワーク（JDDネット）受託事業への派遣は、JDDネット本部事務局、現地（福島県相馬市）の拠点であるNPO法人サポートセンターぴあ、現地の活動場所であるゆうゆうクラブや相馬養護学校、当協会制度対策部の理事と部員、その部員で現地コーディネーター役を担っていただいている作業療法士との間で連携・調整を行いながら進めてきた。

2) ボランティア派遣の実態

(1) ボランティアの募集と登録の開始（平成23年3月18日）

平成23年3月11日の地震発生を受けて、協会は翌12日に災害対策本部を設置。見舞文の配信・掲載、専用メールアドレスの設定、被災地の各県士会とのネットワーク構築、被災地の県士会宛に初期対応支援金の送金、支援金の募集口座の開設等々の初期対応を経て、3月18日に協会ホームページに災害対策本部からのお知らせ（第5報）として「災害支援ボランティアの募集について」を掲載。ボランティア登録者は約1ヵ月後の4月19日時点で128名を数え、最終的には215名（うち非会員4名）にのぼった。

(2) 生活機能対応専門職チームへの派遣（平成23年4月3日~5月9日）

3月16日に、大川弥生氏（当時：独立行政法人国立長寿医療研究センター生活機能賦活研究部部長）の呼びかけで、日本作業療法士協会、日本理学療法士協会、日本言語聴覚士協会、日本リハビリテーション医学会、日本精神保健福祉士協会、日本臨床心理士会、日本心理臨床学会、日本介護支援専門員協会、全国社会福祉協議会、日本介護福祉士会の10団体の関係者が参集し、「生活機能対応専門職チーム」を結成、避難所で過ごしている方を対象としたボランティア活動を行うこととなつた。目的は廃用性症候群の予防、心身機能の維持、生活の再構築の3点であり、具体的な支援としては相談（傾聴）、動作指導、環境整備（物・人）とされた。支援活動は当初3月26日から開始される予定だったが、諸般の事情で1週間ずれ込んで4月3日から開始となり、5次にわたって活動が行われた。当初数ヶ月にわたって続けられる計画が示されており、協会としてもそのつもりで派遣要員の人選・調整を進めていたが、4月中旬に方針転換があり、5月の連休明けで終了することとなつた。当協会からは各期に2名ずつ、計10名のボランティアを派遣した。派遣の実態は次の通りである。

第一次派遣：4月3日~4月9日（2名）

第二次派遣：4月9日~4月16日（2名）

第三次派遣：4月16日~4月23日（2名）

第四次派遣：4月23日~4月30日（2名）

第五次派遣：4月29日~5月2日、5月6日~9日（2名）

活動場所は宮城県仙台市の若林区避難所、宮城野区避難所であつた。活動の詳細は生活機能対応専門職チームの報告を参照していただきたい。

(3) 宮城県作業療法士会への派遣（平成23年4月15日~9月22日）

4月12日に宮城県作業療法士会から最初の派遣要請を受け、以後4月15日から9月22日までの5ヶ月あまりの期間に19回にわたって延べ65名（実人数52名、うち非会員作業療法士1名）のボランティアを派遣した。派遣の実態は次の通りである。

第一次派遣：4月15日~4月22日（9名）

第二次派遣：4月22日~25日（2名）

第三次派遣：4月29日~5月1日（4名）、
4月29日~5月6日（5名）

第四次派遣：5月6日~8日（1名）、
5月8日~13日（3名）

第五次派遣：5月13日~15日（3名）、
5月15日~20日（5名）

第六次派遣：5月22日~27日（4名）

第七次派遣：5月29日~6月3日（4名）

第八次派遣：6月11日～6月18日（3名）
第九次派遣：6月18日～6月25日（4名）
第十次派遣：6月25日～7月2日（2名）
第十一次派遣：7月9日～7月15日（1名）
第十二次派遣：7月18日～7月23日（4名）
第十三次派遣：7月23日～7月30日（2名）
第十四次派遣：7月30日～8月6日（1名）
第十五次派遣：8月6日～8月13日（2名）
第十六次派遣：8月13日～8月20日（2名）
第十七次派遣：8月27日～9月3日（1名）
第十八次派遣：9月3日～9月10日（2名）
第十九次派遣：9月20日～9月22日（1名）

仙台での集合場所・宿泊施設は「介護老人保健施設せんだんの丘」であった。自家用車、高速バス、後には鉄道等で仙台入りしたボランティアは、まずここに集合し、宮城県作業療法士会のコーディネーターからオリエンテーションを受け、一泊した後、ここを拠点として石巻市、気仙沼市、南三陸町など実際に支援活動を行う被災地へと派遣された。

ボランティア活動は大きく2つのパターンで行われた。金曜日に仙台入り、土・日と石巻で活動し、日曜日一杯活動して、日曜日の夜もしくは月曜日の朝に帰途につく短期コース。金曜日に仙台入り、土曜日から1週間ほどの期間を目安として、気仙沼・南三陸町で活動する長期コースである。ボランティアの希望と都合で調整を図った。

現地での支援活動の実際は、派遣先によって、また派遣された時期によって大きく変化している。詳しくは宮城県作業療法士会の報告を参照していただきたい。

(4) 岩手県作業療法士会への派遣（平成23年5月1日～7月22日）

4月16日に岩手県作業療法士会から最初の派遣要請を受け、以後5月1日から7月22日までの約3ヶ月の間に12回にわたって延べ37名（実人数37名、但し宮城県へ派遣した実績のある会員3名も含む）のボランティアを派遣した。派遣の実態は次の通りである。

第一次派遣：5月1日～5月6日（3名）
第二次派遣：5月8日～5月13日（3名）
第三次派遣：5月15日～5月20日（3名）
第四次派遣：5月22日～5月27日（3名）
第五次派遣：5月29日～6月4日（2名）
第六次派遣：6月5日～6月11日（4名）
第七次派遣：6月12日～6月18日（4名）
第八次派遣：6月19日～6月25日（3名）
第九次派遣：6月26日～7月2日（4名）
第十次派遣：7月3日～7月8日（2名）
第十一次派遣：7月10日～7月15日（4名）

第十二次派遣：7月17日～7月22日（2名）

現地での宿泊場所としては遠野市の六角牛病院の訓練室をご提供いただいた。基本的な活動パターンは、日曜日午後に遠野市に集合後、岩手県作業療法士会のコーディネーターと打合せ、活動地区の下見などを行い、一泊後、月曜日から活動を開始し、可能であれば金曜日まで活動して、土曜日を帰りの移動日に充てる、というものであった。活動場所は、釜石地区（釜石市・大槌町）であり、遠野市から自動車を通い、避難所での活動や在宅訪問などを行った。

なお、遠野市から釜石市まで約40kmの距離があり、また釜石地区内での活動も遠距離の移動が必要であり、ボランティア1人につき車1台で移動することが基本であったため、自動車を問題なく運転できることがボランティアの必須条件となった。ボランティアは、自家用車で現地入りできる方を優先しつつ、県士会で用意しているボランティア専用車1台も利用して行われた。

支援活動の実際は、派遣先によって、また派遣された時期によって大きく変化している。詳しくは岩手県作業療法士会の報告を参照していただきたい。

(5) 日本発達障害ネットワーク受託事業「被災した障がい児に対する相談・援助事業」への派遣（平成23年11月7日～平成24年3月31日、平成24年4月1日～平成25年3月31日、平成25年4月1日～平成26年3月31日）

日本発達障害ネットワーク（JDDネット）が福島県から受託した「被災した障がい児に対する相談・援助事業」に、JDDネットに参画している5つの職能団体から専門家を派遣する形の支援活動であり、平成23年度は11月7日から3月9日までの期間に断続的に5回にわたって延べ9名（実人数9名、但し岩手県・宮城県へ派遣した会員2名を含む）のボランティアを派遣した。平成24年度は5月16日から2月22日までの期間に断続的に4名（実人数4名、但し前年度派遣した会員3名を含む）のボランティアを派遣した。平成25年度は4月24日から2月21日までの期間に断続的に5名（実人数5名、但し前々年度もしくは前年度に派遣した会員3名を含む）のボランティアを派遣した。派遣の実績は次の通りである。

平成23年度

第一次派遣：11月7日～11月11日（1名）
第二次派遣：11月14日～11月18日（2名）
第三次派遣：1月9日～1月13日（2名）
第四次派遣：2月6日～2月10日（2名）
第五次派遣：3月5日～3月9日（2名）

平成24年度

第六次派遣：5月16日～5月18日（1名）

第七次派遣：11月14日～11月16日（1名）

第八次派遣：1月16日～1月18日（1名）

第九次派遣：2月20日～2月22日（1名）

平成25年度

第十次派遣：4月24日～4月26日（1名）

第十一次派遣：8月19日～8月23日（1名）

第十二次派遣：11月20日～11月22日（1名）

第十三次派遣：12月4日（1名）

第十四次派遣：2月19日～2月21日（1名）

現地での宿泊はJDDネットが用意したアパートを利用し、また現地での移動にはレンタカーが用意された。他職種と二名一組で宿泊・活動する機会が多く、また養護学校での支援活動も加わったために、当協会からの派遣者には発達障害領域を専門としている作業療法士で、性別を考慮しながら人選を行った。活動の詳細はJDDネット（被災した障がい児に対する相談・援助事業）との連携活動の報告を参照していただきたい。

(6) 福島県南相馬市への派遣（平成23年12月10日～平成24年3月31日）

福島県作業療法士会からの派遣要請を受け、10月18日に県士会・協会・現地保健センター勤務の作業療法士とで現地打合せを行い、その後の準備期間を経て、平成23年12月10日から（年末年始約3週間の休止期間を挟んで）翌平成24年3月31日までの約3ヶ月の間に13回にわたって延べ23名（実人数23名、但し岩手県・宮城県へ派遣した実績のある会員3名も含む）のボランティアを派遣した。派遣の実態は次の通りである。

第一次派遣：12月10日～12月17日（1名）

第二次派遣：1月9日～1月14日（2名）

第三次派遣：1月14日～1月21日（1名）

第四次派遣：1月21日～1月28日（1名）

第五次派遣：1月28日～2月4日（2名）

第六次派遣：2月4日～2月11日（2名）

第七次派遣：2月11日～2月18日（2名）

第八次派遣：2月18日～2月25日（2名）

第九次派遣：2月25日～3月3日（2名）

第十次派遣：3月3日～3月10日（2名）

第十一次派遣：3月10日～3月17日（2名）

第十二次派遣：3月17日～3月24日（2名）

第十三次派遣：3月24日～3月31日（2名）

支援活動の調整・指示・引き継ぎ等を行う現地コーディネーターがいない中で、ボランティア同士の自立した連携が求められた活動であり、宿泊施設や備品等も協会が自前で用意したという点で、他の支援活動における派遣方法とは毛色が異なっている。今後またこのような派遣方法が必要となる場合もありうることを仮定すると、種々の反省点を生かすこと

も含めて一つの有益な試みとなった。

(7) 岩手県岩泉町「平成24年度高齢者の新たな生きがい事業」への派遣（平成24年10月9日～平成25年3月2日）

本受託事業の実施期間は平成24年10月1日から平成25年3月31日だったが、この間、現地での支援活動は10月9日から3月2日までの間に断続的に8回にわたって行われ、延べ24名（実人数7名）のボランティアを派遣した。派遣の実態は次の通りである。

第一次派遣：10月9日（2名）

第二次派遣：10月30日（3名）

第三次派遣：11月4日（1名）

第四次派遣：12月2日（2名）

第五次派遣：12月9日～12月10日（4名）

第六次派遣：1月18日～1月20日（3名）

第七次派遣：2月2日～2月3日（5名）

第八次派遣：3月1日～3月2日（4名）

災害支援ボランティア活動が始動 「生活機能対応専門職チーム」を結成

阪神・淡路大震災、新潟中越沖地震等のボランティア活動の教訓から、多職種専門職チームによる総合的な支援の必要性が明らかになっています。そこで去る3月16日、下記団体の関係者が集まって全国組織レベルの「生活機能対応専門職チーム」を結成し、避難所で過ごしの方々に対する支援のボランティア活動を行うことになりました。

目的は、廃用性症候群の予防、心身機能の維持、生活の再構築の3点です。具体的な支援としては、相談（傾聴）、動作指導、環境整備（物・人）となります。

以下、打ち合わせ会で決定した内容をお知らせします。なお、この内容は現時点での計画（案）ですので、活動に対する意見がありましたら、災害対策本部（jaot_saigai@yahoo.co.jp）までご連絡ください。

【参加団体】

日本作業療法士協会、日本理学療法士協会、日本言語聴覚士協会、日本リハビリテーション医学会、日本精神保健福祉士協会、日本臨床心理士会、日本心理臨床学会、日本介護支援専門員協会、全国社会福祉協議会、日本介護福祉士会

【活動予定】

3月17日～3月24日 内閣府、厚生労働省、被災地自治体との調整

3月25日 発団式及びボランティア活動研修会

パイロット活動（対象：仙台市若林区避難所）

3月26日～4月3日 第一次パイロット活動

4月3日～4月10日 第二次パイロット活動

4月10日～4月17日 第三次パイロット活動

岩手・宮城・福島・茨城の各県専門職チームによるボランティア活動

4月18日～4月20日 ボランティアへの研修

4月25日～ ボランティア活動開始

・県外の登録ボランティアも専門職チームの一員として随時協力

・原則として避難所が閉鎖されるまで活動継続の予定

【組織体制】

- 1) パイロット活動や研修については、全国レベルの「生活機能対応専門職チーム」が企画・遂行する。
- 2) 本格的なボランティア活動開始に向けて早急に、岩手・宮城・福島・茨城の各県レベルの「生活機能対応専門職チーム」を結成していただく。具体的なチーム編成、活動内容は、各県と個別に協議し、当該県の実情に合わせて決めることとする。なお、専門職チームの結成については、各団体の全国組織から各県の士会・支部に知らせが行くことになっているが、不明な点があれば協会事務局までご連絡いただきたい。

【ボランティア要員の確保】

各参加団体でボランティア要員を募集・登録し、各県チームの必要性に応じてボランティアを派遣する。各県チームの災害対策窓口は各参加団体からボランティアの登録情報を入手し、ボランティア要員の調整を行う。ボランティアの募集は各参加団体がホームページ等を通して行う。

以上、第1回「生活機能対応専門職チーム」打ち合わせ会の報告でした。

被災された方々に、如何にして効率的にサービスを提供できるかが大切なポイントです。「人は作業を行うことで健康になれる」という原点に立ち返り、避難所の皆様の自立支援をサポートしていきたいと思います。多くの会員の支援をお願いします。

災害対策本部長 中村 春基
災害対策部員 小林 毅

災害対策本部からのお知らせ （第5報） 3月18日

社団法人 日本作業療法士協会
会 員 各 位

社団法人 日本作業療法士協会
会 長 中 村 春 基

災害支援ボランティアの募集について

すでに報道などでご存じのように、今回の地震災害により多くの被災者が避難所などで不安な日々を過ごしています。協会は、「災害対策本部からのお知らせ（第4報）」にありますように、多職種で構成する「生活機能対応専門職チーム」の一員として、現地での不活発病予防と生活機能の獲得に向けた支援を実施することとなりました。当面のパイロット介入をもとにして、多くの被災地域に専門職チームでのボランティア活動を展開していきますが、被災地域が広範囲に及ぶこと、また、期間的にも1年近くの介入が必要と予想されることから、協会が災害支援ボランティアを募集して、現地の専門職チームの必要に応じて派遣していくことを考えております。特に避難所や仮設住宅での「廃用（生活不活発病）の予防」、「心身機能の維持」、「主体的な生活の再構築」のためには作業療法が大いに期待されるところであります。作業療法士としての十二分に能力を活かし、被災地の早期復興にご協力くださいますようお願い致します。ボランティアを希望される会員は、下記の＜ボランティアの基本的な条件＞をお読みいただいた上で、「災害支援ボランティア登録票」をダウンロードし、必要事項をご記入のうえ、指定のメールアドレスまで送信してください。

＜ボランティアの基本的な条件＞

- 初期には原則1週間、現地に留まっていただくことが前提となります。その後は現地の実情に応じて、またボランティア側の条件を勘案して、短期間の派遣も可能になると考えています。
- 指定する集合時間・場所まではご自分の責任で来ていただき、その際の旅費・交通費は自己負担となります。
- ボランティアの傷害保険は協会加入します。但し、地震・津波等の天災は補償の対象外となりますことをあらかじめご了承ください。

災害支援ボランティア登録票 [ダウンロード](#)

メール送信先 ot_volunteer@yahoo.co.jp

社団法人 日本作業療法士協会
会 員 各 位

社団法人 日本作業療法士協会
会 長 中 村 春 基

災害支援ボランティアの応募・派遣実績と今後の募集について

3月17日に募集を開始して1ヵ月が経過し、4月19日現在128名の方にご登録いただいております。ボランティアの基本は自発性・無償性・利他性・先駆性といわれていますが、まさにこうしたボランティア精神に富んだ多くの会員が、被災者の皆様に思いを寄せ、少しでも力になりたい、自分にできる貢献をしたいという一心で登録してくださったものと思います。会長としてこれらの会員を誇りに思いますとともに、改めて心から感謝を申し上げます。

これまでの派遣実績

宮城県

1) 仙台市若林区

多職種からなる「生活機能対応専門職チーム」の一員として仙台市若林区の避難所に介入しています。4月3日から4月23日までの3週間は初動のパイロット活動と位置づけ、今後の支援活動につなげるための状況把握・ニーズ把握を兼ねながら、①生活機能（特に「活動」「参加」）の向上、②生活不活発病予防・改善を目的に被災者の支援を行ってきました。第一次パイロット活動（4月3日～9日）に2名、第二次活動（4月9日～16日）に3名、第三次活動（4月16日～23日）に2名を派遣したところであり、4月23日をもってパイロット活動としては終了しますが、23日以降も引き続き毎週2名ずつボランティアを派遣して支援活動を継続してまいります。

2) 気仙沼・石巻

宮城県作業療法士会が県との連携の下で、気仙沼・石巻地域に介入する支援活動に、協会からも4月15日～22日の日程で9名のボランティアを派遣しています。気仙沼地域では、気仙沼保健事務所の担当理学療法士のマネジメント下で、在宅のリハニーズの掘り起こし、医療チームでの訪問活動などを、また石巻市では、石巻保健事務所の担当理学療法士のマネジメント下で、2つの避難所を統合する際の環境整備や牡鹿半島の被災者の状況把握などを行っています。5月以降も順次ボランティア派遣を行ってまいります。

岩手県

岩手県作業療法士会が県と多職種との連携の下で、釜石地区（釜石市・大槌町）に介入する支援活動（介護予防と生活支援）を開始しています。県士会員が主として週末（土・日）に活動を行うのに対し、平日の支援活動をつなぐために、協会からも5月から毎週2～3名ずつのペースでボランティアを派遣することになりました。現地の支援活動では車での移動が必須ですが、多くの登録ボランティアが自家用車での現地入りに快く手を挙げてくださっています。

今後の派遣に向けて、もっと多くのボランティア登録を！

地震発生から1ヵ月が過ぎ、上記のような支援活動が始まったところですが、今後、支援の対象となる地域がさらに拡大することが予想され、またリハビリテーションの必要性もこれから本格的に顕在化し、長期にわたって続くものと考えられます。まだまだ多くのボランティアが必要です。どうぞ一人でも多くの会員にご登録いただければ幸いです。

登録から派遣までの流れ（図参照）

- ①ボランティアを希望する会員には、随時、ボランティア登録をしておいていただきます（登録内容には、行ける時期、現地に滞在できる期間、自家用車の使用の可否、派遣公文書の要不要などを含む）。
- ②被災地の支援団体（県士会等）から協会事務局にボランティアの派遣要請が来ます。
- ③そのつどの要請の具体的な条件（人数、時期、期間、その他）に見合う登録者に、協会事務局から派遣の打診を行います。
- ④協会事務局で種々調整を行い、派遣するボランティアを決定します。
- ⑤派遣が決定したボランティアのリストを協会事務局から被災地の支援団体（県士会等）に知らせます。
- ⑥被災地の支援団体（県士会等）と派遣ボランティアとの間で支援活動に関する打合せ・連絡調整等を行っていただきます。

ボランティアの基本的な条件

ボランティアを希望される会員は、次の＜ボランティアの基本的な条件＞をお読みいただいた上で、「災害支援ボランティア登録票」をダウンロードし、必要事項をご記入のうえ、指定のメールアドレスまで送信してください。

- 初期には原則1週間、現地に留まっておくことが前提となります。その後は現地の実情に応じて、またボランティア側の条件を勘案して、短期間の派遣も可能になると考えています。
- 指定する集合時間・場所まではご自分の責任で来ていただき、その際の旅費・交通費は自己負担となります。具体的な集合場所や時間、現地までの交通手段等については、派遣のご依頼をする際に個別に指定もしくはご相談いたします。
- 宿泊先については、できるだけ協会もしくは現地の作業療法士会で確保したうえで、派遣のご依頼をさせていただきます。但し、寝袋等の寝具はご自身でご用意ください。
- 作業療法士としての臨床経験年数は特に問いませんが、現地の方に負担をかけることなく自立して動けること、自分の水・食料・衣類・日用品は自身で調達することを大前提とし、一ボランティアとしては現場の求めに応じて機敏に柔軟に対処しながら、適宜専門性を発揮して支援チームの有用な一員として機能することが求められます。
- 傷害保険： 当協会の会員で、ボランティアに派遣される方の傷害保険は協会で加入します。但し、地震・津波等の天災は補償の対象外となりますことをあらかじめご了承ください。
- 賠償責任保険： 当協会の会員であり且つ当年度の会費を納入されている方は、「作業療法士総合補償保険制度」の基本プラン（対人賠償：保険金額200万円、対物賠償：保険金額10万円、等）に自動加入しています。さらなる補償を希望される方は任意加入の「上乗せ補償プラン」もあります。

災害支援ボランティア登録票 [ダウンロード](#)

メール送信先 ot_volunteer@yahoo.co.jp

現在までの登録者数 128名 （2011年4月19日現在）

2. 災害支援ボランティアに関するアンケート調査

1) はじめに

災害対策室では、大規模災害を想定した支援体制整備の一つとして、「災害支援ボランティアマニュアル」の作成作業を現在進めている。

このマニュアルの作成にあたり、東日本大震災時に一般社団法人日本作業療法士協会（以下、協会）より災害支援ボランティアとして派遣された会員の実情や意見を取り入れるべく、今回、災害支援ボランティア経験者を対象にアンケート調査を実施した。以下にその結果を報告する。

なお、複数の設問に対して同じ回答がみられる場合があるのは、ボランティアに複数回参加された方が異なる時期の活動に関して同様の記述をしたことを反映している。また自由記載に関しては、一部誤字・脱字を修正して掲載していることをお断りしておく。

このアンケート調査と、ボランティアマニュアルの原案については、「ボランティア集会」においても報告された。この集会は、協会派遣の災害支援ボランティアを対象に参加を呼びかけ、第47回日本作業療法学会期間中の平成25年6月29日に大阪市内で行われた。集会では、このほかにも協会の支援活動報告や、被災した3県の士会からの現状報告があり、今回の支援活動に関する問題点の指摘や、平時における支援体制について議論された。

2) 方法

a.調査対象と回収率

協会の災害支援ボランティア135件を対象にアンケート調査を実施した。回収数は87件（複数回派遣されたボランティアもいたため、実人数としては68人）、回収率は64.4%だった。

b.アンケート調査内容

アンケートは、以下の4点を軸に構成された。（p.74-77のアンケート調査票参照）

- 1) 参加者の基本的情報を得るための所属、専門分野、期間、派遣先
- 2) ボランティア登録から派遣決定までについて（Q1～Q15）
 - ・ボランティア登録から派遣までの流れが適切だったか
 - ・協会派遣の災害支援ボランティアの多くが一週間単位の活動であったことについて、長さは適切か、職場での扱いについて、職場や家庭での理解について
 - ・無償のボランティアであったことについて、諸費用の補助の有無、無償であることについて
 - ・派遣決定から派遣までの間に行われた協会もしくは

は被災地の士会からの情報提供について、適切であったか、またボランティア同士の情報交換について

3) 現地でのボランティア活動（Q16～Q26）

- ・被災地での災害支援活動について、支援活動を行った場、活動の内容、活動時の人的体制について、活動報告書について
- ・ボランティアの受け入れ態勢について、士会担当者や現地コーディネーターによる支援活動に関する説明と指示について
- ・宿泊施設や移動手段について

4) 災害支援ボランティア活動を経験して感じたことなど（Q27～Q32）

- ・災害支援活動に持っていたイメージと実際の活動の異同
- ・作業療法士（以下、OT）として学びとなったこと
- ・今後の活動への助言、災害支援ボランティアへの心構え、ボランティア後の活動について

一般社団法人 日本作業療法士協会 災害対策室
災害支援ボランティアに関するアンケート調査

本アンケート調査は、日本作業療法士協会が募集し派遣したボランティアの災害支援活動に限定して行うものです。
複数回参加された方は、その都度の活動に関してご回答いただければ幸いです。

提出締切：2013年3月11日（月）

会員番号、氏名、所属

専門分野【身体障害、精神障害、発達障害、老年期障害、その他（ ）】

期 間： 年 月 日 ～ 年 月 日

派遣先：

【ボランティア登録から派遣決定まで】

I. 今回の震災対応では、①事前にボランティア登録し、②被災地から要請がある度にメールで募集案内が配信され、
③希望者が応募し、④応募者の中から派遣者を調整する、という手順で派遣が決定されました。

Q1 登録から派遣までの流れについて……

1. わかりやすい 2. ふつう 3. わかりにくい

Q2 登録票の記載事項について……

1. 適切 2. もっと詳細な条件設定をしたい 3. 手間がかかりすぎる

Q3 募集案内の情報量について……

1. 適切 2. 少なすぎる 3. 多すぎる

Q4 その他、お気づきの点やご要望があれば自由に記載してください。

II. 平成23年度中の協会派遣ボランティア活動の多くは、平日を中心とした1週間単位の活動でした。

Q5 派遣期間の長さについて……

1. 長すぎる 2. ちょうどよい 3. 短すぎる 4. どちらとも言えない

Q6 職場での扱いについて……

1. 業務として派遣 2. ボランティア休暇制度を利用 3. 有給休暇を利用 4. 休職中
5. その他（ ）

Q7 職場や家庭での理解について……

- | | | | | | |
|-------|----------|-----------|--------------|--------|--------|
| 〈施設長〉 | 1. 推奨された | 2. 理解があった | 3. 理解がなく苦勞した | 4. 無関心 | 5. 休職中 |
| 〈同 僚〉 | 1. 推奨された | 2. 理解があった | 3. 理解がなく苦勞した | 4. 無関心 | 5. 休職中 |
| 〈家 族〉 | 1. 推奨された | 2. 理解があった | 3. 理解がなく苦勞した | 4. 無関心 | |

Q8 その他、お気づきの点やご要望があれば自由に記載してください。

Ⅲ. 協会派遣の災害支援活動は基本的に無償のボランティアでした。支援活動の期間と広がりが見通しが立たない中で、協会は予算の限度内でしか動けない有償ボランティアではなく、ボランティアの原点に還って自発性、利他性とともに無償性の理念を重視した経緯があります。

Q9 派遣にかかった諸費用について……

1. 全額自費 2. 勤務施設から全額支給 3. 勤務施設から一部補助 4. 所属士会から全額支給
5. 所属士会から一部補助 6. その他 ()

Q10 Q9で、「1」以外に○を付けた方にお尋ねします。差し支えない範囲で、支給・補助の実際を記載してください。

Q11 無償であることについて……

1. ボランティアとして当然と考える 2. 自己負担は厳しいがやむを得ない 3. 協会が費用負担すべき
4. 支援金から支出すべき 5. その他 ()

Ⅳ. 派遣決定から派遣までの間に、協会もしくは被災地の士会からさまざまな情報提供を行いました。

Q12 支援活動に関して事前に提供された情報について…… 「2」の場合、どのような点に問題があり、その情報をどのように入手しましたか？

- 〈現地までの経路〉 1. 適切 2. 少ない・不適切 → ()
〈宿泊施設〉 1. 適切 2. 少ない・不適切 → ()
〈服装・持ち物等〉 1. 適切 2. 少ない・不適切 → ()
〈食事や生活事情〉 1. 適切 2. 少ない・不適切 → ()
〈現地の被災状況〉 1. 適切 2. 少ない・不適切 → ()
〈支援活動の内容〉 1. 適切 2. 少ない・不適切 → ()

Q13 ボランティア同士でも事前に情報交換を行いましたか？……

1. はい 2. いいえ

Q14 Q13で「1」に○を付けられた方にお尋ねします。情報交換を行った方法や内容について記載してください。

Q15 その他、お気づきの点やご要望があれば自由に記載してください。

【現地でのボランティア活動について】

Ⅴ. 実際に被災地に行かれてからの災害支援活動について伺います。

Q16 支援活動を行った場について（複数回答可）……

1. (福祉) 避難所 2. 仮設住宅 3. 対象者の自宅 4. 病院 5. 高齢者施設
6. 障害者施設 7. 特別支援学校 8. その他 ()

Q17 支援活動の内容について（複数回答可）……

1. その時々現場で必要とされた、一般ボランティアと同様の（特別に専門性を要しない）様々な雑用
2. バイタルチェック 3. 傾聴、心のケア 4. 生活環境の評価・整備 5. 福祉用具の選定・適合
6. 自助具類の作製 7. 高齢者・障害者の動作指導 8. 体操・運動指導 9. レクリエーション指導
10. その他 ()

Q18 現場での活動時の人的体制について（複数回答可）……

1. 単独（1人）で行動
2. 他のOTと常時複数体制（自分を含めて 人）
3. 他職種と常時複数体制（自分を含めて 人）
4. その他（ ）

Q19 協会・士会が用意した活動報告書（日報）の様式について、ご意見・ご要望、その他お気づきの点やご要望があれば自由に記載してください。

Q20 その他、被災地の災害支援活動についてお気づきの点があれば自由に記載してください。

VI. ボランティアの受け入れ体制について伺います。

Q21 被災地の県士会担当者による、支援活動に関する説明と指示について……

1. 十分な説明と明確な指示があり、活動に取り組みやすかった
2. 大枠の説明と指示はあったが、自分で判断せざるを得ないことも多かった
3. その他（ ）

Q22 Q21で「2」に○を付けられた方にお尋ねします。具体的にどのように対応されたかを記載してください。

Q23 被災地の現地スタッフ（コーディネーター）による、支援活動に関する説明と指示について……

1. 十分な説明と明確な指示があり、活動に取り組みやすかった
2. 大枠の説明と指示はあったが、自分で判断せざるを得ないことも多かった
3. その他（ ）

Q24 Q23で「2」に○を付けられた方にお尋ねします。具体的にどのように対応されたかを記載してください。

VII. 宿泊施設や移動手段について伺います。

Q25 現地で宿泊した場所について（複数回答可）……

1. ホテル・旅館・民宿等
2. 受け入れ側が借り上げたアパート等
3. 研修センター等の公共施設
4. 会員・関係者の病院・施設等
5. 会員・関係者の個人宅
6. ボランティア自身の実家・知人宅等
7. その他（ ）

Q26 現地での移動手段について……

1. 県士会や現地スタッフが用意した専用の自動車（レンタカーを含む）
2. 現地スタッフ個人の自家用車
3. ボランティア自身が借り上げたレンタカーやタクシー
4. ボランティア自身の自家用車
5. 他職種が使用する自動車に便乗
6. その他（ ）

Q27 現地での宿泊施設や移動手段について、気づいたこと、問題点、要望などがありましたら、自由に記載してください。

【災害支援ボランティア活動を経験して】

Ⅷ. 実際に災害支援活動を経験した方ならではの感想や思い、知見や認識があると思います。

Q28 「災害支援活動」にどのようなイメージをもって臨まれたでしょうか。事前にイメージしていた活動と実際に行った活動との異同や、もしイメージ通りでなかった場合はその具体的な違いなどについて、具体的に記載してください。

Q29 災害支援ボランティア活動を通して、ご自身の作業療法士としての「学び」になったことは何でしょうか。

Q30 これから災害支援ボランティアに行く人に向けてご助言ください。（ここでは理念的なことではなく、断片的でも結構ですので、できるだけ具体的で実用的なアドバイスを列举してください。）

Q31 災害支援ボランティアの心構えとは何でしょうか。

Q32 災害支援ボランティア後に行った活動があれば記載してください。（体験報告会、研修会、現地への再訪問、情報収集など）

ご協力ありがとうございました。

3) 結果

(1) 基本情報

・所属（現在の所属都道府県）について

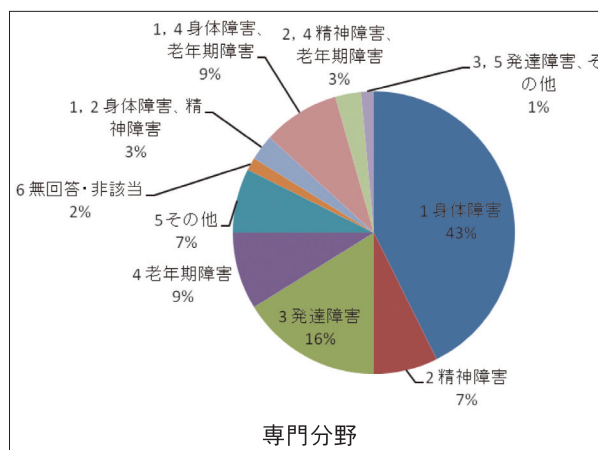
現在の所属都道府県は以下のとおりである。被災地への距離に比例することなく、全国から参加している。ただし、アンケート調査はボランティア派遣から2年以上経過しているケースも多く、派遣当時の所属は異なっていた可能性はある。

都道府県	回答数	割合	都道府県	回答数	割合
北海道	5	7.4%	京 都	1	1.5%
青 森	1	1.5%	大 阪	5	7.4%
秋 田	1	1.5%	兵 庫	2	2.9%
福 島	2	2.9%	岡 山	2	2.9%
茨 城	3	4.4%	広 島	1	1.5%
栃 木	1	1.5%	福 岡	1	1.5%
群 馬	1	1.5%	長 崎	1	1.5%
埼 玉	6	8.8%	大 分	1	1.5%
千 葉	6	8.8%	宮 崎	1	1.5%
東 京	7	10.3%	合 計	68	100.0%
神奈川	7	10.3%			
新 潟	1	1.5%			
石 川	1	1.5%			
福 井	1	1.5%			
長 野	2	2.9%			
岐 阜	1	1.5%			
静 岡	2	2.9%			
愛 知	4	5.9%			
滋 賀	1	1.5%			

・専門分野について

専門分野は、身体障害分野が他分野との併記を合わせると半数を超えている。OT全体の割合からすると、発達障害分野がやや多く、精神障害分野がやや少ない。

専門分野	回答数	割合
1 身体障害	29	42.6%
2 精神障害	5	7.4%
3 発達障害	11	16.2%
4 老年期障害	6	8.8%
5 その他	5	7.4%
6 無回答・非該当	1	1.5%
1,2 身体障害、精神障害	2	2.9%
1,4 身体障害、老年期障害	6	8.8%
2,4 精神障害、老年期障害	2	2.9%
3,5 発達障害、その他	1	1.5%
合 計	68	100.0%



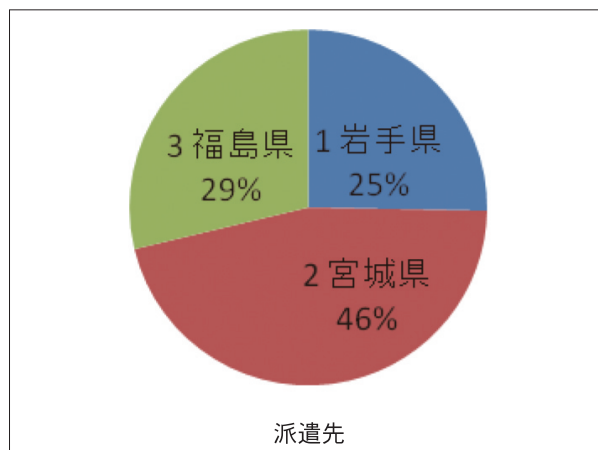
・派遣期間について

派遣期間は、平均5.89日であった。派遣の時期については、岩手県が平成23年5月～7月、宮城県が平成23年4月～9月、福島県が平成23年11月～平成25年2月であった。

・派遣先について

派遣先は岩手県が25.3%、宮城県が46.0%、福島県が28.7%であった。

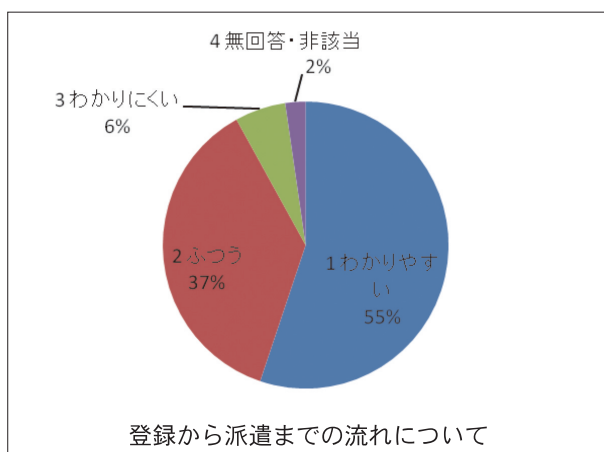
派遣先	回答数	割合
1 岩手県	22	25.3%
2 宮城県	40	46.0%
3 福島県	25	28.7%
合 計	87	100.0%



(2) ボランティア登録から派遣決定まで

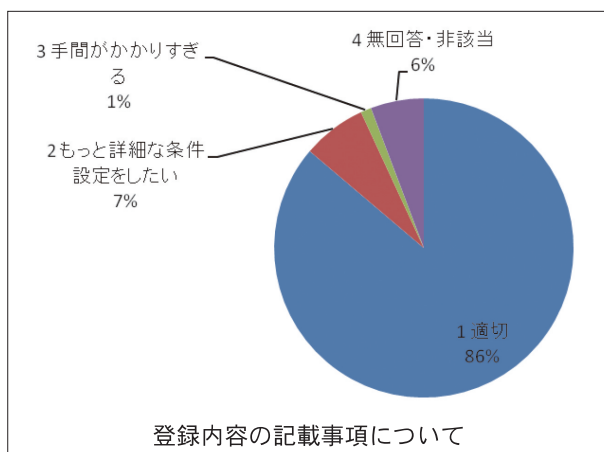
Q1 登録から派遣までの流れについては、「わかりやすい」か「ふつう」が9割を超えていた。

Q1	回答数	割合
1 わかりやすい	48	55.2%
2 ふつう	32	36.8%
3 わかりにくい	5	5.7%
4 無回答・非該当	2	2.3%
合 計	87	100.0%



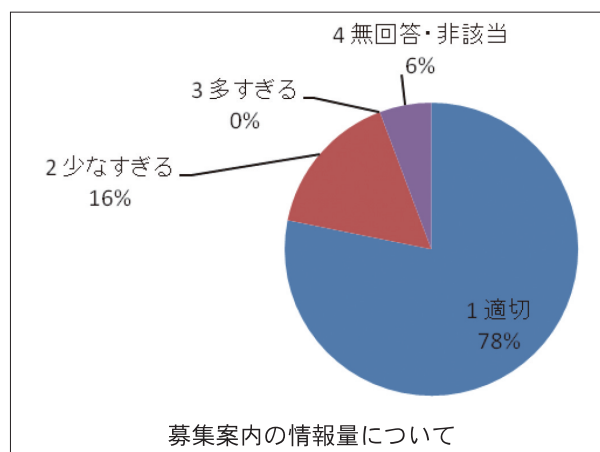
【Q2】登録票の記載事項については、「適切」と答えた人が9割に近かった。

Q2		回答数	割合
1	適切	75	86.2%
2	もっと詳細な条件設定をしたい	6	6.9%
3	手間がかかりすぎる	1	1.1%
4	無回答・非該当	5	5.7%
合 計		87	100.0%



【Q3】募集案内の情報量については、約8割が「適切」としていた。

Q3		回答数	割合
1	適切	68	78.2%
2	少なすぎる	14	16.1%
3	多すぎる	0	0.0%
4	無回答・非該当	5	5.7%
合 計		87	100.0%



【Q4】その他、気付いた点や要望の自由記載について、岩手県派遣、宮城県派遣では、被災地の情報が少なかったが、状況を考えると仕方のない時期だった、という意見が多かった。また、情報を発信していた方の意見も聞いたほうがいい、という意見もあった。福島県派遣では、長期に渡る募集について、もう少しOT以外の方の目にとまるような紹介や広報をしてもよかったのではないか、という意見があった。

《H23年4月～5月》宮城県派遣

- ・まだ情報が十分にある状況ではなかったもので、少なかったが仕方のない時期であった。
- ・混乱時期で仕方なかったと思いますが、持っていかずとも現地で調達できたものすでに整えられているものがありました。
- ・Q3について、情報が少なく感じたが、あの当時の状況であれば仕方なかったのかと思う。しかし、今後は、活動内容、生活面についての情報が得られる努力は必要である。
- ・若い（経験の浅い）OTは、現場での行動が1人でできなかった。ペアで行動する為、活動の範囲が狭くなった。
- ・結局電話でのやりとりが多かったように思う。
- ・ボランティア募集の（登録時）内容では、4月は若林地区での実施で、その結果を踏まえてゴールデンウィーク以降ボランティアの募集がかかるということだったのに、4月中に行けないかと連絡がきたので驚いた。災害時はニードも刻々と変化するのでボランティアを調整するのは大変だと思う。
- ・どこの団体からの要請かをはっきり明記して下さると良いと思いました。
- ・記載事項、情報量は詳細に多くが望ましいが、緊急事態時の対応として扱える量に限度があると思われるため「適切」とした。実際にそれらを処理した方々の意見を参考にするとういのではないかな。
- ・月単位でかまわないので、ホームページやメール等で進捗状況（募集状況・派遣状況）がもう少しリアル

ルタイムでわかると、もっとよかったと思います。
仮になにも進んでなくとも、それはそれで情報として欲しかったように思います。

- ・情報量など少ないとは思いましたが、あのような状況では仕方ないと思う。
- ・Q2, Q3についてはよく覚えていない。

《H23年5月》岩手県派遣

- ・震災初期の対応だったので、流れのわかりにくさは仕方ないことだと思います。問い合わせに対する反応が早く助けられた。
- ・派遣一次隊であったことから、「車で入れるかどうか」「ガソリン確保が可能か」を出発前に県士会から情報提供いただけたのが良かった。
- ・ボランティア登録から現場に行くまであまりに少ない情報交換の中で現場スタッフと合流するまで不安でした。
- ・情報については、災害時はしょうがない

《H23年6月～7月》岩手県派遣

- ・私自身が精神専門だったため、正直なところ役に立てるかという不安はありました。登録に際し、事務局の方とその点に対する確認を行った経緯がありました。案内の情報量はボランティアと共に緊急的な状況ですから、詳しいほど良いと思う以上に「仕方ない」という思いがありました。限られた情報で動くという気持ちでした。
- ・特に面倒な印象はうけませんでした
- ・行く前の情報としては少ないように感じましたが、行ってみてからはそのようにしか提示できないため納得しました。

《H23年6月～9月》宮城県派遣

- ・とてもよかったと思います
- ・応募から返信までに時間がかかり、職場の調整が難しかった
- ・Q2, Q3についてはよく覚えていない。
- ・派遣の依頼から派遣日まで数日しかなく、航空券の手配などが大変でした。
- ・自分は何度か派遣されたので、状況が何となく把握できたが、他のOTの方から「登録したがどうなっているのか」という声を聞くことがあった。派遣状況が閲覧できるしくみがあれば良いのでは、と思う。

《H23年11月～H24年2月》福島県派遣

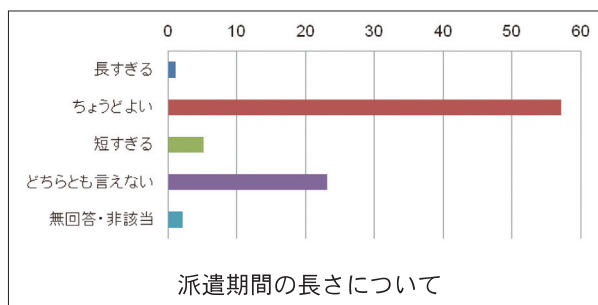
- ・この事業の采配の全体像が見えないので、登録してよいか登録後も自分がどういう位置づけにいるのか不安と自信のなさがつきまとった。
- ・協会会員以外の方々（市民も含め）にももう少し募集案内が目に残ればOTや協会の活動の紹介、宣伝にもなったのでは。
- ・前任者との情報交換がしにくい。間に入る人が不明瞭だった。（協会?現地OT?）

《H24年3月～H25年2月》福島県派遣

- ・事前情報が少なく、何をしたらよいか不安だった。
- ・もっと募集に力を入れてもよいのでは、と思いました。自宅会員にはあまり情報が来なかったもので。

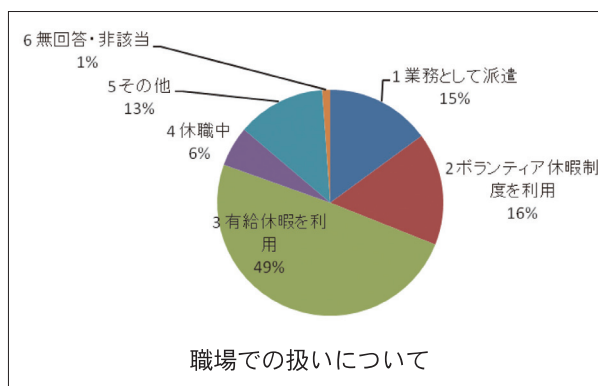
【Q5】 派遣期間の長さについては、回答の65%が「ちょうどよい」との答えだった。また、「どちらとも言えない」と答えた人が26%いた。

Q5		回答数	割合
1	長すぎる	1	1.1%
2	ちょうどよい	57	65.5%
3	短すぎる	5	5.7%
4	どちらとも言えない	23	26.4%
5	無回答・非該当	2	2.3%



【Q6】 職場での扱いについては、5割が有給休暇を利用していた。業務として派遣されたケースも15%あった。

Q6		回答数	割合
1	業務として派遣	13	14.9%
2	ボランティア休暇制度を利用	14	16.1%
3	有給休暇を利用	43	49.4%
4	休職中	5	5.7%
5	その他	11	12.6%
6	無回答・非該当	1	1.1%
		合 計	87
			100.0%

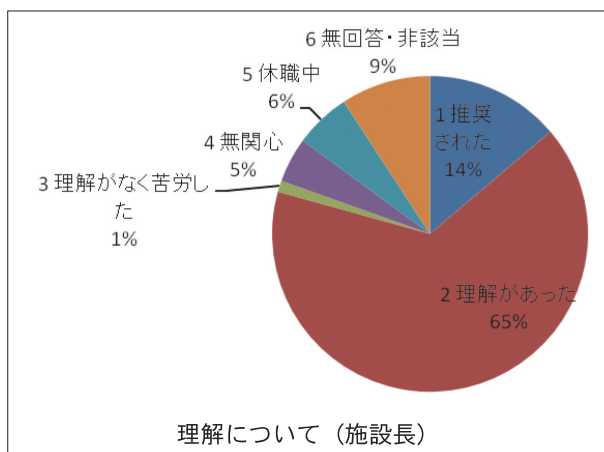


その他の内容は、土日利用や無所属だった、半分業務で半分有給、終了後に業務に変更になった、などの意見があった。

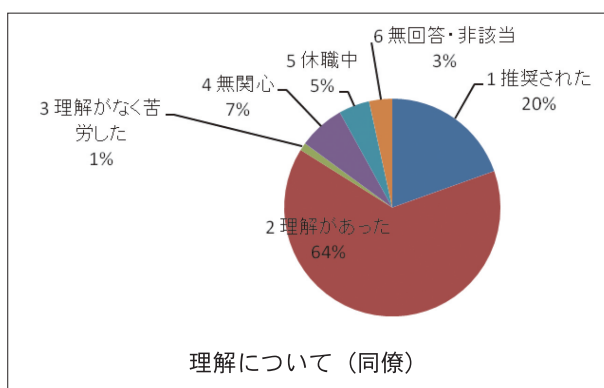
【Q7】 職場や家庭での理解について、施設長は「推奨

された」と「理解があった」を合わせて8割近かった。同僚は「推奨された」と「理解があった」を合わせて85%だった。家族は「推奨された」と「理解があった」を合わせて95%近いが、「理解がなく苦労した」も5%あった。

Q7	施設長	回答数	割合
1	推奨された	12	13.8%
2	理解があった	57	65.5%
3	理解がなく苦労した	1	1.1%
4	無関心	4	4.6%
5	休職中	5	5.7%
6	無回答・非該当	8	9.2%
		合 計	87 100.0%

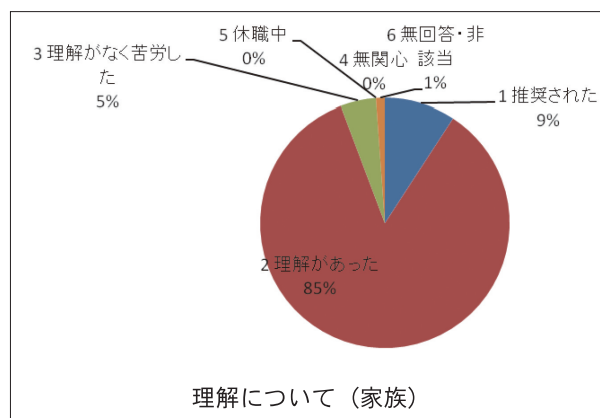


Q7	同僚	回答数	割合
1	推奨された	17	19.5%
2	理解があった	56	64.4%
3	理解がなく苦労した	1	1.1%
4	無関心	6	6.9%
5	休職中	4	4.6%
6	無回答・非該当	3	3.4%
		合 計	87 100.0%



Q7	家族	回答数	割合
1	推奨された	8	9.2%
2	理解があった	74	85.1%

3	理解がなく苦労した	4	4.6%
4	無関心	0	0.0%
5	休職中	0	0.0%
6	無回答・非該当	1	1.1%
		合 計	87 100.0%



Q8 その他、気付いた点や要望についての自由記載は、正規の一週間という日程に受け入れ側もボランティア側も合わない時期があったのではないかと指摘や、家族がいると期間や費用などが問題になってくるのではないかと、との意見があった。また、所属長の理解について、業務派遣という扱いでないと職場での理解が得にくい、との意見もあった。福島県派遣では、放射能の影響への理解が必要だった、との意見があった。

《H23年4月～5月》宮城県派遣

- ・状況が呑み込めたころには終了してしまう。動きようがないので次に伝える事も難しい状況。
- ・本務との調整は大きな課題であることは当然です。
- ・理解がありましたが、2回目を検討した時に上司など（OT）に相談すると、「また行くの?」という表情をされてしまいました。それでも行こうとは思っていましたが、当時、当院ではボランティアに対する制度がなく、院長・理事など相談し、業務として参加できる制度を確立させた（当時、リハ部統括だった）。
- ・自己責任の範囲内での参加なので、職場で休みをとり易ければもっと参加したかった。有休の範囲内で参加するしかなかった。
- ・派遣の受け入れ期間が土曜夕方～土曜等ときっちりと決まっており、少し前後すると都合がつくのだが調整が難しいと感じた。また、数日延長できる場合でもその対応をしてもらうことは難しかった（県士会の方は、協会からの契約変更は良くないから、とのことだった）。
- ・どのような状態を理解があったといえるのかよくわかりませんが、職場は直属上司に理解があったため業務に支障がでなければOKという考えだった。家族は心配していたが、押し切られた感じだと思う。

《H23年5月》岩手県派遣

- ・施設長というよりは、所属長の理解が得られたのが大きかった。一方で事務での扱いは「ボランティア」なのか「業務派遣」なのかを明確にしないと「ただゴミ拾いに行ったのでしょうか」という見方に終始していた様に思います。
- ・期間はもう少し長くてもいい。
- ・もう少し長くボランティアをできればと思った。

《H23年6月～7月》岩手県派遣

- ・職場によって対応も様々ようなので期間設定には何とも言えません。個人的には、一週間は適当でそれ以上では困難と思う。
- ・派遣期間が長ければそれだけの状況を理解し、貢献できる部分もあるかと思いますが、所属における仕事もあり、結果として1週間程度だからボランティアが可能だったと考えます。
- ・個人的には一週間は短く感じたが、家族、職場を考えると、一週間は良い期間。
- ・通常業務も人手不足であり、言いづらかった。言ってしまうと理解は得られた。

《H23年6月～9月》宮城県派遣

- ・再募集とのメールを見て一週間の要請だったが、3日間であればと問い合わせをし、派遣に至った。イレギュラーではあったが、現地は人手不足で1日でも助かるという状況であった。そういったことは、募集のメールからは伝わりにくかった。
- ・どのような状態を理解があったといえるのかよくわかりませんが、職場は直属上司に理解があったため業務に支障がでなければOKという考えだった。家族は心配していたが、押し切られた感じだと思う。
- ・期間や費用について、自分は单身だったので特に問題なかったのですが、家族がいると難しいこともあるのだらうなと思います。ただ、「できる人ができることをやればよい」とも思います。
- ・派遣先の方から、一週間単位の関わりでは、慣れた頃に居なくなってしまうので連携が取りにくいとお話がありました。

《H23年11月～H24年2月》福島県派遣

- ・常勤職の人や若い人は職場の理解がないと応募できないと思う。(休む期間や収入減、自己負担など)
- ・もう一週間程度いたかったが、事情により戻らざるを得なかった。
- ・事務局の動きはしっかりしていて情報も充実していて安心でした。ありがとうございました。

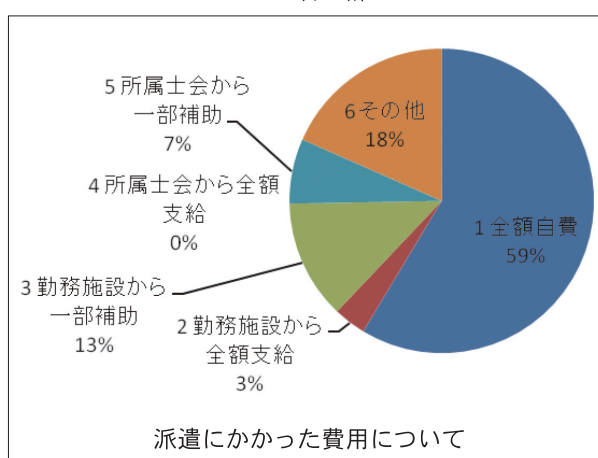
《H24年3月～H25年2月》福島県派遣

- ・被災地であり、放射能の影響も心配されましたが説明と想いを伝えることで理解を得ることができました。
- ・なかなか一週間、職場をお休みするのは難しいので、

週末のみなどがあれば活動しやすいと思いました。

【Q9】 派遣にかかった諸費用について、「全額自費」の回答が6割だった。勤務施設から補助が支給されたケースも15%あった。

Q9		回答数	割合
1	全額自費	51	58.6%
2	勤務施設から全額支給	3	3.4%
3	勤務施設から一部補助	11	12.6%
4	所属士会から全額支給	0	0.0%
5	所属士会から一部補助	6	6.9%
6	その他	16	18.4%
合 計		87	100.0%



【Q10】 Q9で「1」以外に○を付けた方の支給・補助の実態については、宮城県士会より後日一日約9,000円の日当を頂いた、福島県やJDDネットからの助成、パイロット事業のためレンタカー代などはPT、OT、ST協会などの合同支出だった、高速道路は補助制度を利用した、同僚のカンパがあった、県士会から一部補助があった、などの意見があった。また、有償ボランティアの可能性についての意見もあった。

《H23年4月～5月》宮城県派遣

- ・パイロット事業のため、滞在費なども共同の施設があった。
- ・道士会から、支援金として3万円支援して頂きました。
- ・年末に病院から社会貢献として表彰された。
- ・確か、所属士会から15,000円くらい頂いたと思います。実際には準備品や交通費も含めると10万円くらい自費となりました。
- ・同僚が有志で資金を出してくれた。派遣先の県士会から一部負担していただいた。
- ・交通上は神奈川県からの災害支援申請で高速道路無料、その他は自費でしたが、後日宮城県士会より頂きました。
- ・北海道道北支部より、宮城県士会より、日本作業療

法士協会より

《H23年5月》岩手県派遣

- ・交通費は協会からいただきました。ボランティアは無償で当然だと思います。
- ・県士会よりガソリン代を支給いただきました。ありがとうございました。
- ・往復の交通費。

《H23年6月～7月》岩手県派遣

- ・申請書類提出し災害ボランティア車両通行許可証をもらった。
- ・交通費の支給を領収書に基づき援助いただいた。
- ・現地移動でかかったガソリン代。
- ・派遣先の県士会からガソリン代のみいただいた。高速道路はボランティアで無料だった。
- ・交通費一部日当。

《H23年6月～9月》宮城県派遣

- ・日本OT協会は「ボランティアはあくまでもボランティア」というスタンスを崩されなかったことに失望と向上性のなさ、国民への寄与の貧しさを悲しかった。このスタンスが理解できません。一部の方の意見で決めないで下さったらよかったです。もし経済的な支援があればボランティアは途切れなかった可能性がもっと高かったと思います。大変残念です。
- ・交通費のみ支給された。
- ・2（勤務施設から全額支給）：航空券、日当×5日分、5（所属士会から一部補助）：4万円

《H23年11月～H24年2月》福島県派遣

- ・報酬費一日9,300円（食費、税込）交通費実費支給、現地ではレンタカー支給を受けるか否かは本人の自由で辞退してもよいが自分は経済的に余裕がないので受けた。
- ・JDDネットより交通費、食費、日当が支給された。宿泊の前泊・後泊は実費。
- ・アパートは協会に負担していただきました。
- ・自営業のため全額自費でもあり、勤務施設から全額支給でもあります。
- ・費用の半分程度カンパいただきました。
- ・交通費、報償費。
- ・往復航空券、前泊のための宿泊費、新幹線往復運賃、福島駅南相馬市バス往復運賃、日当（食費として）。

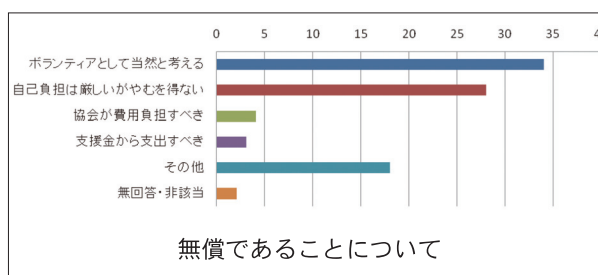
《H24年3月～H25年2月》福島県派遣

- ・自費で臨む予定で格安航空券、夜行バス、兄弟の自宅泊等経費を抑えていましたが、施設長から法人へ募金の呼びかけがあり総額15万円の善意が寄せられました。所属士会へは派遣自体、積極的な報告をしていませんでした。（一個人として参加したかったため）
- ・交通費、宿泊費指定。

- ・旅費の一部をカンパしてもらった（25,000円くらい）。
- ・交通費、日当が支払われる。

Q11 無償であることについては、7割が「無償で当然」「やむを得ない」と答えている。

Q11		回答数	割合
1	ボランティアとして当然と考える	34	39.1%
2	自己負担は厳しいがやむを得ない	28	32.2%
3	協会が費用負担すべき	4	4.6%
4	支援金から支出すべき	3	3.4%
5	その他	18	20.7%
6	無回答・非該当	2	2.3%



その他として、ボランティアとして自己負担は当然であるとの一方で、長期に継続してボランティアを募集する場合には、交通費などの一部助成があれば参加者が増加したのではないかと、との意見もあった。

《H23年4月～5月》宮城県派遣

- ・協会としての派遣事業であれば当然支出すべきだが、ボランティア募集のように任意とはきちんと区別すべき。
- ・活動そのものに対する報酬は不要でも、交通費が支給されるとボランティアが集まりやすいと思う。
- ・自分は無償であっても参加したいと考えますが、少しでも有償だと参加者が参加しやすいのではないかと感じました。何回か参加したい場合、少しでも支援（金銭的）があると、参加する側としては有難く思います。しかし、協会としては資金の問題や継続性を考えると難しさはあると考えます。
- ・一部支援金から支出。
- ・日本はボランティア=無償の考えが根付いているが、本来はボランティアは自発的意志、自己負担は普通のことだと思っている。今回、費用が出てありがたいと思っています。
- ・長期的に支援する場合は、3（協会の費用負担）・4（支援金からの支出）の整備が必要と考えます。
- ・日当はなくとも、補助をいただいたので持ち出しはなかった。ボランティアとしては充分だったと思う。
- ・どのような形態を派遣と言うのか、今回の形態を派遣と言うのかよくわかりませんが、宿泊先を準備してもらっていたので、完全に無償ではないのでは？

宿泊費はどこから出ていたのでしょうか？

《H23年5月》岩手県派遣

- ・有償ボランティアも考えてよいと思います。

《H23年6月～7月》岩手県派遣

- ・財源があれば皆助かることは事実。
- ・住んでいる所から対象となる地区まで旅費はあると行きやすくなると思われる。災害地域までの旅費は協会が負担すべきと思う。

《H23年6月～9月》宮城県派遣

- ・どのような形態を派遣と言うのか、今回の形態を派遣と言うのかよくわかりませんが、宿泊先を準備してもらっていたので、完全に無償ではないのでは？宿泊費はどこから出ていたのでしょうか？
- ・一部支援金から支出。
- ・自分は1（ボランティアとして無償は当然）と考え活動していましたが、他団体との差などにより応募が少ないようであれば、協会の費用負担も考慮すべきかと思いました。

《H23年11月～H24年2月》福島県派遣

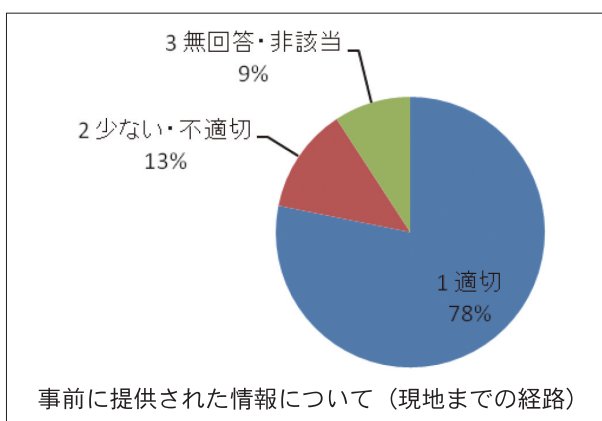
- ・全て自己負担は厳しい。
- ・補助があると家庭での理解が得やすい。

《H24年3月～H25年2月》福島県派遣

- ・交通費を出してもらえるとありがたい。
- ・全て自己負担は厳しい。
- ・補助があると家庭での理解が得やすい。

Q12 支援活動に関して事前に提供された情報について、現地までの経路、宿泊施設については8割近くが、服装・持ち物等、食事や生活事情については74%が「適切」としていた。現地の被災状況、支援活動の内容については「適切」が5割強に減少し、4割弱が「少ない・不適切」と答えた。

Q12	現地までの経路	回答数	割合
1	適切	68	78.2%
2	少ない・不適切	11	12.6%
3	無回答・非該当	8	9.2%
合 計		87	100.0%



少ない・不適切、と答えた場合、どのような点に問題があり、どのように情報を入手したか、については、情報が少なかったが、現地の状況を考えれば仕方がない状況だった、との意見が多かった。その中でインターネットなどを使って自分で調べた、という意見があった。

《H23年4月～5月》宮城県派遣

- ・現地の状況がよくわかっていない時期だった。
- ・震災から1か月がたたない状況ではやむを得ません。
- ・当時は自分で調べるのが当然でしたので、そのような意味で適切です。事前の情報は頂いていませんが、あれば、それはそれで有難いと思います。
- ・集合当日に向かえなかったため、県士会の方と直接のやりとりとなりました。
- ・ネットで復旧している交通手段を確認。
- ・提供されなかった。
- ・提供がなかったように思う。
- ・提供時期が数日前であり、協会ではなく県士会のコーディネーターからの連絡待ちであったため、問い合わせすることもできず準備に困りました。

《H23年5月》岩手県派遣

- ・災害派遣車両の手続きについての情報があまりなかった。

《H23年6月～7月》岩手県派遣

- ・ネットで復旧している交通手段を確認。

《H23年6月～9月》宮城県派遣

- ・初日せんだんの丘に集まって初めて知ること多かつた。もう少しメールで情報がとれるといいですね。
- ・提供時期が数日前であり、協会ではなく県士会のコーディネーターからの連絡待ちであったため、問い合わせすることもできず準備に困りました。
- ・前回を参考にした。

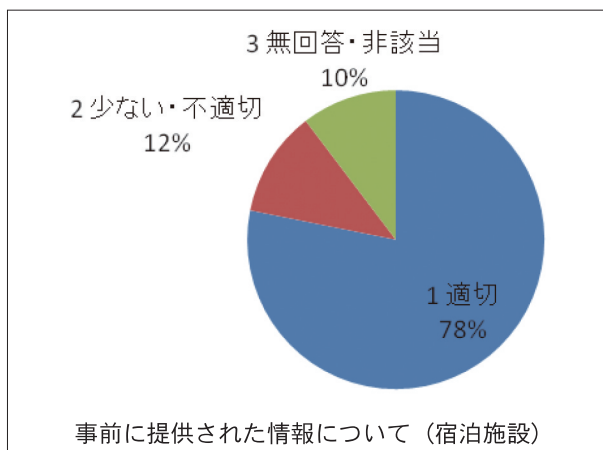
《H23年11月～H24年2月》福島県派遣

- ・県士会代表から福島県委託事業として丁寧な情報提供を受けた。
- ・通行止めの情報が少なかった。
- ・2回行っていたので自分で判断。

《H24年3月～H25年2月》福島県派遣

- ・自己検索。
- ・県士会代表から福島県委託事業として丁寧な情報提供を受けた。

Q12	宿泊施設	回答数	割合
1	適切	68	78.2%
2	少ない・不適切	10	11.5%
3	無回答・非該当	9	10.3%
合 計		87	100.0%



宿泊施設に関して、少ない・不適切、と答えた場合、どのような点に問題があり、どのように情報を入手したか、については、現地までの経路情報と同様に、情報が少なかったが現地の状況を考えれば仕方がない状況だった、との意見が多かった。

《H23年4月～5月》宮城県派遣

- ・現地の状況がよく分かってない時期だった。
- ・震災から1か月がたたない状況ではやむを得ません。
- ・詳細がなかった。
- ・提供されなかった。
- ・派遣が私一人大きなホテル（震災関係者専用となっていた）で女性は私一人で怖かった。
- ・仕方がないかもしれないが、提供者があまり情報を持っていない様に感じた。
- ・2日目から宿泊地が変わったが、もし事前に分かっていたら連絡が欲しかった（持ち物の関係上）。
- ・提供時期が数日前であり、協会ではなく県土会のコーディネーターからの連絡待ちであったため、問い合わせすることもできず準備に困りました。

《H23年5月》岩手県派遣

- ・スタートなので適切だったと思う。
- ・協力病院での宿泊だったが、男性、女性ミックスだったので、車内での生活だった。

《H23年6月～9月》宮城県派遣

- ・初日せんだんの丘に集まって初めて知ることも多かった。もう少しメールで情報がとれるといいですね。
- ・提供時期が数日前であり、協会ではなく県土会のコーディネーターからの連絡待ちであったため、問い合わせすることもできず準備に困りました。

《H23年11月～H24年2月》福島県派遣

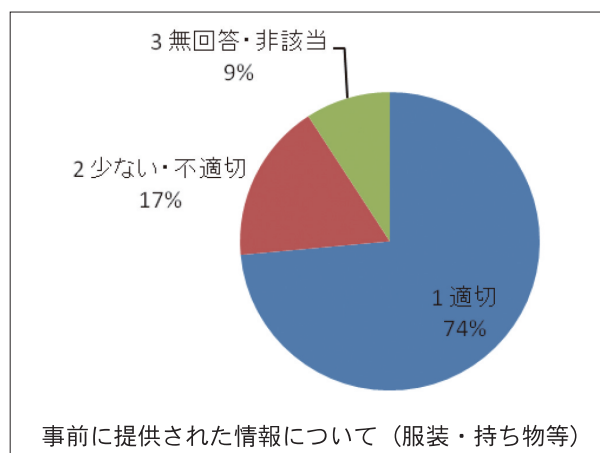
- ・気温に関する情報が欲しかった。

《H24年3月～H25年2月》福島県派遣

- ・物品の情報に問題あり

Q12	服装・持ち物等	回答数	割合
1	適切	64	73.6%
2	少ない・不適切	15	17.2%

3 無回答・非該当 8 9.2%
合 計 87 100.0%



服装・持ち物等に関して、少ない・不適切、と答えた場合、どのような点に問題があり、どのように情報を入手したか、については、一般のボランティア情報を参考にしたという意見が多かった。

《H23年4月～5月》宮城県派遣

- ・現地の状況がよく分かってない時期だった。
- ・震災から1か月がたたない状況ではやむを得ません。
- ・一般のボランティア情報を参考にした。
- ・一般的なボランティアの方のホームページで準備。
- ・もう少し詳しくわかればよいが、日々状況は変わるので仕方ないと思う。
- ・一般のボランティア情報を参考にした。
- ・宿泊施設に何でも揃っていた。
- ・提供時期が数日前であり、協会ではなく県土会のコーディネーターからの連絡待ちであったため、問い合わせすることもできず準備に困りました。

《H23年5月》岩手県派遣

- ・参加スタッフ間で確認。

《H23年6月～7月》岩手県派遣

- ・現地で必要な物を岩手県土会に尋ねた。

《H23年6月～9月》宮城県派遣

- ・初日せんだんの丘に集まって初めて知ることも多かった。もう少しメールで情報がとれるといいですね。
- ・提供時期が数日前であり、協会ではなく県土会のコーディネーターからの連絡待ちであったため、問い合わせすることもできず準備に困りました。
- ・一般ボランティアのマニュアルを見るともっと具体的だった。

《H23年11月～H24年2月》福島県派遣

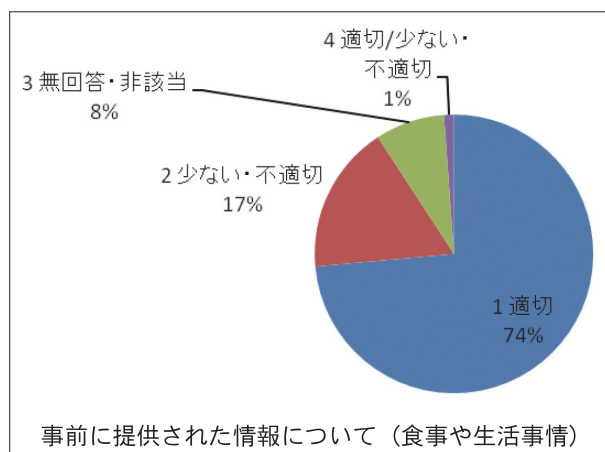
- ・活動内容と服装が今一つ想像できなかった。
- ・必要物品を協会からの支給品でまかになった。
- ・前任者との情報交換がしにくい。

《H24年3月～H25年2月》福島県派遣

- ・寒さが分からない。

・前任者に連絡。

Q12	食事や生活事情	回答数	割合
1	適切	64	73.6%
2	少ない・不適切	15	17.2%
3	無回答・非該当	7	8.0%
4	適切/少ない・不適切	1	1.1%
		合 計 87	100.0%



食事や生活状況に関して、少ない・不適切、と答えた場合、どのような点に問題があり、どのように情報を入手したか、については、前情報よりも潤沢に入手できた、との意見があった。

《H23年4月～5月》宮城県派遣

- ・現地の状況がよく分かっていない時期だった。
- ・現地では思ったより色々調達できました。
- ・震災から1か月がたたない状況ではやむを得ません。
- ・食品を大量に持っていったが、現地にあった。
- ・県士会の方のお気遣いが多くあり、持参分が余り、施設へ残して帰りました。
- ・3.11直後であったため、仕方ないと思います。先に行った方と直接コンタクトを取って情報収集しました。
- ・もう少し詳しくわかればよいが、日々状況は変わるので仕方ないと思う。
- ・良いことだが、事前の情報より環境がよかった。
- ・何もないかと思っていたが、スーパー等が通常通り開いていた。
- ・提供時期が数日前であり、協会ではなく県士会のコーディネーターからの連絡待ちであったため、問い合わせすることもできず準備に困りました。

《H23年5月》岩手県派遣

- ・ガソリンが手に入ることは確認したが、コンビニがあるか否かなどの情報がもう少し確認してもよかった。

《H23年6月～9月》宮城県派遣

- ・初日せんだんの丘に集まって初めて知ること多かったです。もう少しメールで情報がとれるといいですね。

- ・提供時期が数日前であり、協会ではなく県士会のコーディネーターからの連絡待ちであったため、問い合わせすることもできず準備に困りました。

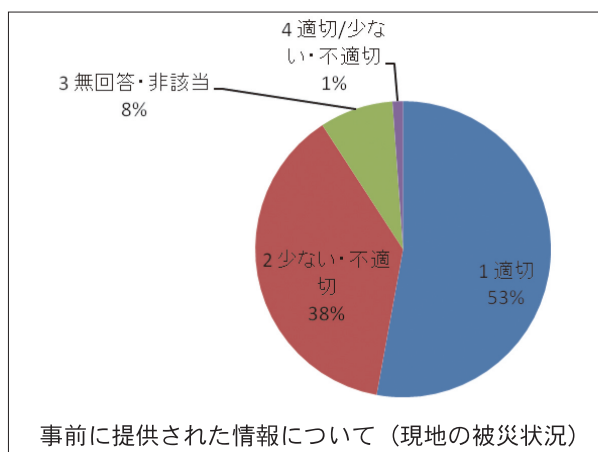
- ・前回に入ったボランティアからの情報。

- ・宮城県士会長との連絡。事前に同じところの経験者に連絡する等して自己解決した。被災地支援中のスタッフへの迷惑が心配。

《H24年3月～H25年2月》福島県派遣

- ・米があることが分からなかった。

Q12	現地の被災状況	回答数	割合
1	適切	46	52.9%
2	少ない・不適切	33	37.9%
3	無回答・非該当	7	8.0%
4	適切/少ない・不適切	1	1.1%
		合 計 87	100.0%



現地の被災状況に関して、少ない・不適切、と答えた場合、どのような点に問題があり、どのように情報を入手したか、については、混乱していた時期なので仕方なかったという意見が多かった。

《H23年4月～5月》宮城県派遣

- ・現地の状況がよく分かっていない時期だった。
- ・混乱のさなか、仕方なかったと思います。
- ・震災から1か月がたたない状況ではやむを得ません。
- ・詳細不明であった。
- ・宿泊地と支援先でかなり差があることが分かっていませんでした。
- ・ネットで確認。
- ・どのような支援をするのか現場で確認を行った。
- ・3.11直後であったため、仕方ないと思います。先に行った方と直接コンタクトを取って情報収集しました。
- ・適切とは言い難いかもしれないが、現地で詳細な説明を受けたので、よかったと思う。
- ・日々状況が変化する時期であったため、情報の少なさは仕方がない。
- ・少なかったが、支障はなかった。行ってみないと分

からないものだと思う。

- ・提供時期が数日前であり、協会ではなく県士会のコーディネーターからの連絡待ちであったため、問い合わせすることもできず準備に困りました。

《H23年6月～7月》岩手県派遣

- ・タイムラグがあった。

《H23年6月～9月》宮城県派遣

- ・初日せんだんの丘に集まって初めて知ることも多かった。もう少しメールで情報がとれるといいですね。
- ・提供時期が数日前であり、協会ではなく県士会のコーディネーターからの連絡待ちであったため、問い合わせすることもできず準備に困りました。
- ・前回に入ったボランティアからの情報。
- ・適切とは言い難いかもしれないが、現地で詳細な説明を受けたので、よかったと思う。
- ・宮城県士会長との連絡。事前に同じところの経験者に連絡する等して自己解決した。被災地支援中のスタッフへの迷惑が心配。
- ・現地で話を聞いた。
- ・初めての支援内容であったため、県士会の方も情報をよく把握していない様子でした。現地説明にて問題はなかったです。

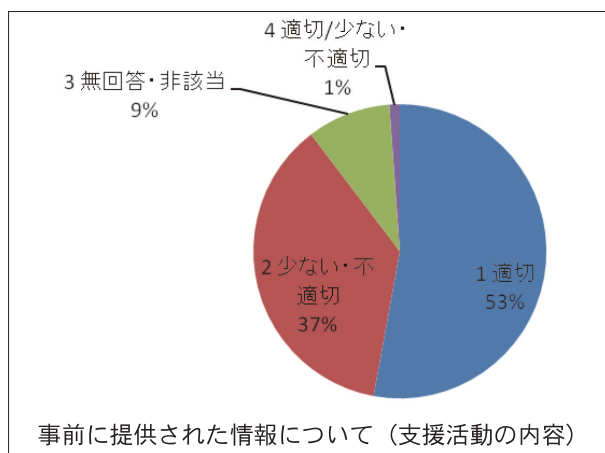
《H23年11月～H24年2月》福島県派遣

- ・放射線が人体に及ぼす影響について。

《H24年3月～H25年2月》福島県派遣

- ・前任者に確認。
- ・現地に到着後被災地を訪れ情報収集した。

Q12 支援活動の内容	回答数	割合
1 適切	46	52.9%
2 少ない・不適切	32	36.8%
3 無回答・非該当	8	9.2%
4 適切/少ない・不適切	1	1.1%
合 計	87	100.0%



支援活動の内容に関して、少ない・不適切、と答えた場合、どのような点に問題があり、どのように情報入手したか、については、情報は欲しかったが混乱してい

た時期なので仕方ないとの意見があった。

《H23年4月～5月》宮城県派遣

- ・現地の状況がよく分かっていない時期だった。
- ・混乱のさなか、仕方なかったと思います。
- ・震災から1か月がたたない状況ではやむを得ません。
- ・現地で説明があった。
- ・県士会からのメール。
- ・どのような支援をするのか現場で確認を行った。
- ・3.11直後であったため、仕方ないと思います。先に行った方と直接コンタクトを取って情報収集しました。
- ・もう少し詳しくわかればよいが（室内活動ありとか）、日々状況は変わるので仕方ないと思う。
- ・少なかったが、それでいいと思う。
- ・日々状況が変化する時期であったため、情報の少なさは仕方がない。
- ・少ないが、ニーズは刻々と変わるので、それを想定内で赴く方がBetter?
- ・提供時期が数日前であり、協会ではなく県士会のコーディネーターからの連絡待ちであったため、問い合わせすることもできず準備に困りました。
- ・少なかったが、それでいいと思う。

《H23年5月》岩手県派遣

- ・第二次派遣ということで直近だったのでしょうがない。
- ・タイムラグがあった。

《H23年6月～7月》岩手県派遣

- ・活動内容は時間の経過とともに変化するので事前に情報収集は難しいと思う。

《H23年6月～9月》宮城県派遣

- ・初日せんだんの丘に集まって初めて知ることも多かった。もう少しメールで情報がとれるといいですね。
- ・提供時期が数日前であり、協会ではなく県士会のコーディネーターからの連絡待ちであったため、問い合わせすることもできず準備に困りました。
- ・前回に入ったボランティアからの情報・打ち合わせの日に支援内容が決定した（ボランティアに入る前日）。県士会と現地との打ち合わせが不十分?
- ・少なかったが、それでいいと思う。
- ・宮城県士会長との連絡。事前に同じところの経験者に連絡する等して自己解決した。被災地支援中のスタッフへの迷惑が心配。
- ・現地で説明があった。
- ・初めての支援内容であったため、県士会の方も情報をよく把握していない様子でした。現地説明にて問題はなかったです。

《H23年11月～H24年2月》福島県派遣

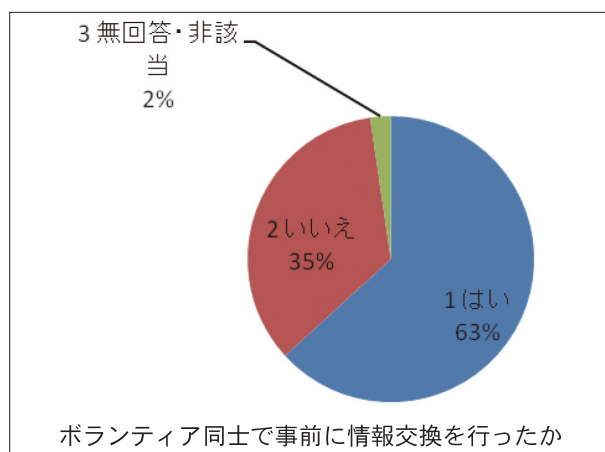
- ・イメージがつきににくかった。

《H24年3月～H25年2月》福島県派遣

- ・ここが一番困る.

Q13 ボランティア同士で事前に情報交換を行ったかどうかについて、63%が情報交換を行った、と答えた.

Q13		回答数	割合
1	はい	55	63.2%
2	いいえ	30	34.5%
3	無回答・非該当	2	2.3%
	合計	87	100.0%



Q14 Q13で事前にボランティア同士で情報交換を行った場合の、その方法や内容について、方法は、メールが多数だった。その他、電話やSNSなどのインターネット上の掲示板、宿泊地にノートを作成し申し送り、カーナビ、という意見があった。内容については、派遣前の挨拶、食事、準備物の確認、交通情報、現地までの経路（乗り合いも含む）、現地情報、生活面での不安や疑問点、前回の活動内容、支援物資についてだった。

《H23年4月～5月》宮城県派遣

- ・方法：メール（多数）、電話、Mixi、宿泊地にノートを作成し申し送り。
- ・内容：派遣前の挨拶、食事、準備物の確認、交通情報、現地までの経路（乗り合いも含む）。

《H23年5月》岩手県派遣

- ・方法：メール（多数）、電話。
- ・内容：支援物資、活動内容、町の状況（飲食店の情報なども）、自己紹介。

《H23年6月～7月》岩手県派遣

- ・方法：メール、電話。
- ・内容：簡単な挨拶、移動手段、持ち物、初回の合流場所。

《H23年6月～9月》宮城県派遣

- ・方法：メール。
- ・内容：現地情報（前回派遣時の）、生活面での不安や疑問点、準備物、現地までの経路、前回の活動内容。

《H23年11月～H24年2月》福島県派遣

- ・方法：メール、ネットの掲示板、電話、カーナビ。
- ・内容：初日の合流場所・時間、生活用具、生活関連施設の登録（カーナビに）、現地の様子・活動の申し送り・生活の様子（福島県士会より）。

《H24年3月～H25年2月》福島県派遣

- ・方法：メール。
- ・内容：自己紹介、準備物、現地の情報（前任者より）。

Q15 その他、気付いた点や要望については、現地の物を消費してはいけないのではないかという観点から過剰な荷物を持参してしまったがその必要はなかった、など現地の状況と参加者の準備との不一致があった。また、被災地では情報が少ないのが当然としてボランティアに向かうべき、との意見があった。協会担当者や士会担当者、現地コーディネーターの負担を減らすためにも、インターネット掲示板などの利用で、リアルタイムに情報を更新できるシステムがあったらよかったのでは、との意見もあった。

《H23年4月～5月》宮城県派遣

- ・情報提供は適切だったように思いますが、未だ報道では沿岸部の現状ばかりであったり、現地の物を消費してはいけないのではないか、という観点から、予測のつかない状況に対し、過剰な荷物を持参してしまいましたが、実際仙台市内は機能しており、その必要はありませんでした。
- ・現地の情報や交通については4月時点では刻々と変化しており、自分でできるだけ情報を入手する。多少考えていた状況と違って対応できるように用意しておく必要はあると思います。
- ・初期段階で情報の少ない中、同市からボランティア同士で現地に向かえたことは心強かった。その情報（同期の連絡先）を頂けたことはありがたかった。
- ・ボランティアなのだから情報が少ないなどと言える立場ではないと思う。個々の判断が必要。
- ・早い段階での派遣であったため、情報は少なくとも仕方がなかったように思いますが、前任者からの引き継ぎ書をメール等で頂ければよりよかったように思います。（参加後の当該施設の基本情報について、作成し報告することを申し出ましたが、現地にて作っても状況が変わるのでいらないと言われました。参加側としてはあるとうれしかったです）。
- ・同地域へ派遣されたボランティア同士で、リアルタイムな情報提供ができると良い。
- ・ボランティアは協会から情報提供がなされる（現地の状況を随時把握している）と考えていました。県士会長自ら大変な中対応してくださり、頭の下がる思いでした。

《H23年5月》岩手県派遣

- ・車を持っていくことを要請されたので、ガソリンの確保、もしもの為の修理場所がわかっていればよかったと思います。
- ・何もかもが初めての経験なので当時の状況から考えて適切だったと思う。

《H23年6月～7月》岩手県派遣

- ・Q11について個人的には1（ボランティアとして無償であることは当然）だか、何度も継続して支援するとなると2（自己負担は厳しいがやむを得ない）である。継続的な支援には何らかの経済的支援が必要と思われる。
- ・私は7次隊でしたが、事前情報は4次隊までで、最近の情報がずっと気になっていました。
- ・新幹線の駅まで迎えに来ていただけたのが、助かった。
- ・情報はあっても実際に行ってみないとわからないことも多い。
- ・ボランティアとして行く以上、情報量が少なかつたとしても、事前に提供された情報で判断することが必要と思って準備をしました。
- ・病院でしか働いていない自分にとっては力不足を感じた。訪問業務などで地域と積極的に関わりを持っているOTのほうがニーズにこたえられると思った。
- ・自分たちが行く前のボラチームの情報があつたので、準備しやすかった。しかし、情報が少ないとか、不適切であるという人はボランティアとして参加するのは困難だと思う。最初から情報が少ないと思う心構えが必要であると思う。

《H23年6月～9月》宮城県派遣

- ・他のボランティアと宿泊施設の設備、準備リストを作成したが、その後のボランティアの方に対し、そのリストは当日現地で渡されたようなので事前にわかればと思った。
- ・日本PT協会の派遣者は仙台で前任者と顔を合わせて申し送りがあり、又、随時インターネットで簡単に活動状況を毎日アップしたものを行く前に見ることができ、疑問点があれば電話やメールで質問することができていた。申し送りは間違った情報が流れると現場が困るということとで最初の頃はOTは県士会がしぶっていた。であるため、同じ宿泊地でないかも知れず、活動内容が変わっているかも知れないことを承知の上で、ボランティア同士で情報交換に努めた。これは必要だったと今も考えます。
- ・私はだいたい生活環境が落ち着いた頃の参加だったので、提供された情報が更新されておらず不適切とも感じましたが、あの頃のことを思うと、当然のことだと思います。不満はないです。他ボランティアからの情報入手や、「わからない」ということがわかるだけでも安心できました。そのようなことから、支

援活動に出かけるときにはある程度不安は少なくなっていたので、結果としては不適切ではなかったと思います。

- ・主に現地での生活事情についてはインターネットで掲示板のような形で誰でも閲覧できるようになっていれば、現地スタッフ、事務局、ボランティア共に負担が少しでも軽減できたのではないかと。
- ・1回目の経験があつたので、そういうものだとわかっており、不適切とは思いませんでした。

《H23年11月～H24年2月》福島県派遣

- ・知り合いがいたのでその方からも色々な情報を得ることができた。その中で自分が入った時期はスーパーやコンビニの営業時間がほぼ正常に戻ったということを知った。
- ・フェイスブックやツイッターなどのSNSで情報共有できたり話し合えれば安心でしたが、できませんでした。私としてはフェイスブックにグループを作ってみたのですが、広まりませんでした。
- ・私のような例以外の方は情報がとりにくかったのではないかと。

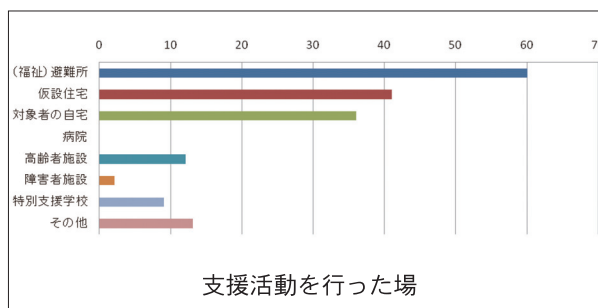
《H24年3月～H25年2月》福島県派遣

- ・一週間交代なのでもっと緊密な連絡がいる。
- ・現地のボランティアセンターのブログも状況を知るのに役立ちました。

(3) 現地でのボランティア活動について

【Q16】 支援活動を行った場について、ボランティア参加者の約7割は（福祉）避難所で活動していた。仮設住宅では約5割、対象者の自宅は約4割が活動していた。

Q16	回答数	割合
1 (福祉) 避難所	60	69.0%
2 仮設住宅	41	47.1%
3 対象者の自宅	36	41.4%
4 病院	0	0.0%
5 高齢者施設	12	13.8%
6 障害者施設	2	2.3%
7 特別支援学校	9	10.3%
8 その他	13	14.9%



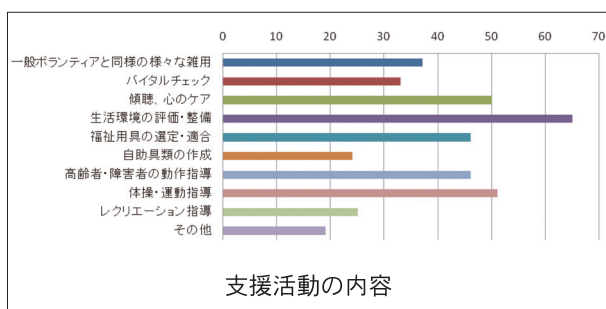
その他として、岩手県、宮城県派遣ではボランティアの宿泊所や屋外、仮設保育所が挙げられていた。福島県

派遣では、児童デイサービス、対象者の通う中学校、地域ミーティング、仮設住宅の集会所、保健センターでの「高齢者フォローアップ教室」、公民館、デイサービス、保健所、児童クラブが挙げられていた。

Q17 支援活動の内容については、生活環境の評価・整備が参加者の75%と最も多かった。以下、体操・運動指導、傾聴・心のケアが約6割、福祉用具の選定・適合、高齢者・障害者の動作指導が53%、一般ボランティアと同様の様々な雑用43%、バイタルチェック38%と続く。

Q17 回答数 割合

1	一般ボランティアと同様の様々な雑用	37	42.5%
2	バイタルチェック	33	37.9%
3	傾聴・心のケア	50	57.5%
4	生活環境の評価・整備	65	74.7%
5	福祉用具の選定・適合	46	52.9%
6	自助具類の作成	24	27.6%
7	高齢者・障害者の動作指導	46	52.9%
8	体操・運動指導	51	58.6%
9	レクリエーション指導	25	28.7%
10	その他	19	21.8%



その他として、岩手県、宮城県派遣のH23年4月～9月については、避難所立ち上げや情報収集と連絡調整など、福島県派遣では、教育関連などが挙げられていた。

《H23年4月～5月》宮城県派遣

- ・避難所ニーズの把握。
- ・避難所たちあげ作業（動線整備、道具調達依頼、他ボランティアとの役割分担、情報引継ぎフォーマット作り、スケジュール作成など）。
- ・在宅被災者に対するアンケート記入。
- ・安否確認、リハサービス必要性の判断、震災時から現在までの情報収集。
- ・前回対応された内容のその後の経過確認、現地コーディネーターへの報告、連絡、相談。

《H23年6月～7月》岩手県派遣

- ・余暇活動の提案、他職種連携。
- ・医療的処置。

《H23年6月～9月》宮城県派遣

- ・スプリント作製。

- ・前回対応された内容のその後の経過確認、現地コーディネーターへの報告、連絡、相談。
- ・趣味活動（裁縫、園芸など）の支援。
- ・ROMex、ポジショニング（同行のPTが主に対応）。
- ・公衆衛生活動。
- ・行動障害のアセスメントをして、同時期派遣の身障系PTOT、現地スタッフに伝えた。

《H23年11月～H24年2月》福島県派遣

- ・特別支援学校における対象児の評価と先生方への説明、指導。
- ・教員支援と放課後支援。
- ・社協の生活支援相談員さんと共に仮設住宅のサロン運営。

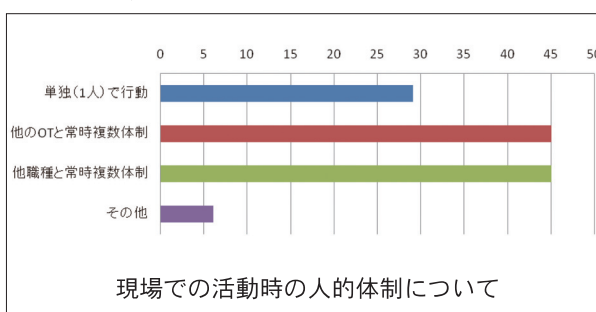
《H24年3月～H25年2月》福島県派遣

- ・遊具の作成。
- ・レクリエーションの実施。
- ・学級訪問、地域ミーティングへの参加。
- ・教員支援と放課後支援。

Q18 現場での活動時の人的体制については、活動期間中に他のOTや他職種と常時複数体制であったとの答えが5割を超えた。他のOTと常時複数体制では、自分を含めて2～9人、他職種と常時複数体制では、自分を含めて2～80人と答えていた。

Q18 回答数 割合

1	単独（1人）で行動	29	33.3%
2	他のOTと常時複数体制	45	51.7%
3	他職種と常時複数体制	45	51.7%
4	その他	6	6.9%



その他として、他のボランティア団体と一緒にあったり、様々なケースが挙げられていた。

《H23年4月～5月》宮城県派遣

- ・妻（助産師）と一緒に。
- ・移動は複数だったが、避難所内では個別対応も行った。

《H23年5月》岩手県派遣

- ・避難所によってはPTとまわった。

《H23年6月～9月》宮城県派遣

- ・移動は複数だったが、避難所内では個別対応も行った。

た。

- ・現地病院のPTと他ボラ団体に所属する人（PTを含む）。
- ・他のボランティア団体と合同で。

《H24年3月～H25年2月》福島県派遣

- ・地域包括支援センター職員と同行。

Q19 協会・士会が用意した活動報告書（日報）の様式についてのご意見・ご要望、気付いた点などの自由記載では、どの時期でも、複数の報告書の作成が負担だった、という意見があった一方で、ボランティア受け入れ側で役立つものであればよい、との意見もあった。

《H23年4月～5月》宮城県派遣

- ・宮城県士会で作成されたものを使用。次につながりそうに思いながら記入しました。とても良かった。
- ・表なのでエクセルの方が扱いやすいかと思いました。
- ・OT協会用と現地士会用の二重の日報がなかったです。
- ・何種類も日報を書くのは手間だった。1種類にまとめられるとよい。全体での活動日記ノートがあればよいと思う。情報収集にムダな時間をさかずに必要な支援について次の人達に伝えていけると思う。
- ・自由記載が多く大変だった。引き継ぎ事項などを書く欄があったが、提出が後日だったので、記入の意義があるのか疑問に思った。
- ・覚えていません。今回のアンケートももう少し早く実施すべきだったのでは？
- ・あまり覚えていないが、書くことが多かったような気がする。
- ・当時としては十分であった。
- ・仕方のないことだったが、現地・県士会・協会とそれぞれに作成しなければならず、大変だった。

《H23年5月》岩手県派遣

- ・項目が多くて記入に時間がかかった。A4一枚程度にまとめられれば良かった。
- ・毎日レポートして提出することが必要だったことから、自分の一日の行動を客観的に記載する上で役立った。
- ・もう少し簡素化かつ明確な内容になれる様式がよい。現地で記載でなく、行い易い活動様式。

《H23年6月～7月》岩手県派遣

- ・現地ではすでに別のフォームを使用したの、そちらを使用した。
- ・災害支援活動に時間を要するため、報告書は短時間で書けるものが良い。
- ・今となっては思い出せませんが、よくわからなかった。たしか、わからないまま提出し、忘れた感があります。
- ・3名のボランティアで釜石地区、大槌地区に分か

れて行動したので、日報は地区ごとに分けて作成しても良かったかも知れません。PC入力に際し、釜石担当スタッフの記入を終えて大槌担当のスタッフが記入することになるので、書き終えるのを待つ必要があった。

- ・1人1人分まとめられて支援の流れを把握できたと思います。
- ・どんな様式か覚えてない。意見なし。

《H23年6月～9月》宮城県派遣

- ・記入欄が自由にできるので、人により書き方が異なると思った。活動内容により枠組みを決める書き方は適さないと考えるが、もう少し形式が明確でもよいと思う。
- ・様式が違うものを2種類、活動終了後に作成することは少し負担がありました。
- ・パソコンを用意してもらっていたので、それまでより、作成しやすかった。
- ・そちらで役に立てばよい。

《H23年11月～H24年2月》福島県派遣

- ・JDDネットの記録用紙は簡単だった。OTの記録はケース個々に記入する必要があるため夜の時間を全てこれに充てて大変だった。
- ・JDDネット用と県士会用の二重の日報が辛かった。
- ・自分はノートパソコンとプリンターを持参して入力出力したので報告書づくりに苦慮することはなかった。今後については備品としてパソコン、プリンターを準備していただけると助かります。
- ・記載しやすかった。
- ・パソコンを用意して打ち込めるようにしてほしい。次に現地へ行くボランティア要員も読めるスタイルにしてほしい。
- ・形式ばったものではなく、臨機応変に自由に記載できてよかったと思う。
- ・宿舎にパソコン、プリンターがあればよかった。

《H24年3月～H25年2月》福島県派遣

- ・HPなどでネットでみられるようにしてほしい。
- ・パソコンを持ち込まなかったので記入が大変でしたが、活動の内容も変化するので自由記入などで枠組みを決めてしまうのは難しいと思います。活動も終わりの頃だったので記録の目的に迷いつつ書きました。
- ・対象者や、次のボランティアに引き継げるような様々なシステムがあればいいと思いました。
- ・過去の日報を見せて頂いたおかげで今までの活動、経過が分かり、活動しやすかった。
- ・今回の記録は帰宅後パソコンで入力して担当OTに送った。
- ・現地団体と士会の二重報告書は大変だった。

Q20 その他、被災地の災害支援活動について気付いた点についての自由記載では、活動内容とOT観とのずれについてや、OTであることの明示の方法についてなど様々な意見が寄せられた。士会や現地スタッフの負担を心配する意見も多かった。

《H23年4月～5月》宮城県派遣

- ・常に宮城県士会のOTとペアでの行動だったので、言葉なども（方言）困ることなく活動できた。
- ・作業療法をするために支援にいくわけではないことを明確にすべきと思いました。現地のニーズに合わせて「OTの知恵を提供する」ことの意味を理解している人とそうではない人がボランティアに来ると思います。何でもするつもりで参加すべきだと思います。
- ・様々な団体が支援に訪れ、そのコーディネートに現地の方々も苦勞されている様だった。現地の方の負担にならないよう配慮し、活動を行ったが、その状況を把握するにも少し時間がかかった。支援したい気持ちが一方的にならないよう、冷静に状況を把握しながら活動することが大切と思う。多くの団体が支援する場所ではコーディネート役がもう少し状況をつかんで伝えてもらえるとうよかった。
- ・まだまだ混乱している時期で、活動も手探りだったように思う。
- ・4月中旬はJICA二本松訓練所で支援していた。後から福島県OT協会に報告や連絡をしておく、県士会の方としても情報把握できてよかった、とアドバイスを頂いた。私も失念していたが、他団体で支援に入る時の情報共有のシステム作りもあると良いのかなと思いました。
- ・現地でのニーズは刻々と変化しますが、「ボランティアがやってあげたいこと」を行ってしまっているケースがみられました。ボランティアで参加する場合は、OTに準じないことが求められることを知っておくべきです。手技で腰痛軽減されている方もいましたが、現地のスタッフからは「正直続けられないのに利用者から求められる」との声もきかれました。
- ・現地コーディネーターのオリエンテーションがしっかりしており、各種団体から入っている各職種の人たちをうまく組み合わせ、活動の開始・終了時に報告、連絡、相談できる時間があったため、非常にやりやすかったし、実際にいろいろボランティアを気づかって下さった。
- ・現地コーディネーターのオリエンテーションがしっかりしていたように感じた。とても活動しやすかった。

《H23年5月》岩手県派遣

- ・名札だけでなく一目で災害支援ボランティアとわかるビブスやジャケットがあった方がよい。災害時だ

けでなく、広報活動時にも使えるように各県で常備しておくとうい。

- ・私自身は第〇次隊などの時期を異なった隊員との交流の場を作ることができませんでした。しかし、受け入れ先で「ノート」を用意していただくことで、同時期に活動した仲間以外との交流も得られる機会を得ることが出来ました。
- ・警察や消防同様に派遣元を明確にした方が良いかも。
- ・ボランティアとして現場にいる人たちが多く、関わった人の多くは、OTって何をしてくれるんですか?という感じだった。関わった人はマッサージを希望する人が多かった。リハ関係かわからないが、中には余計に状態が悪くなったという人もいた。
- ・新人プログラム研修やその他の協会の研修で被災地での活動の心構えや実際のOTとしてどう活動したかを知る機会があってもよい。新人プログラムでは、災害対策というコマがあってもよい。
- ・慣れない環境、不安、心理的ストレスにより、初回の方の派遣期間は1週間程度がよいと思われます。複数回の場合、ご本人が希望されれば、現場との交流がより深められるので、1週間以上でも良いかと思われる。
- ・血圧計や体温計、放射能測定器は持っていき、パルスオキシメーターがあれば良かった。デジカメがあると仮設住宅の改修などに便利。印刷して保健師に渡すこともできた。

《H23年6月～7月》岩手県派遣

- ・現地のコーディネーターの指示があれば、それなりの活動ができると思う。コーディネーターの指示が的確だったので活動しやすかった。
- ・OTとして災害支援についてこれまで学んだこともなく、経験したこともなかったので、手探りでした。マニュアル化できないその場での対応というのが大切だとは思いますが、今回の実績をまとめていくことは大事だと思います。
- ・建物や道路が原型をとどめていないこともあり、車のナビ、地図が役に立たないこともあった。簡単な看板でもあると多くのボランティアが円滑に活動できるかもしれない。
- ・ボランティアで出向く限り相手の状況に合わせて動くべきだと思うので、特に気になりませんでした。ただ、総合的な知識を持ち合わせていないと被災者の方のニーズや被災地の状況を混乱させてしまうだけだと思います。

《H23年6月～9月》宮城県派遣

- ・とにかく現地スタッフががんばっていたことがとても印象に残ります。すばらしい尽力した姿に我々も突き動かされた気持ちです。
- ・協会派遣の災害支援活動が基本的に無償のボランティア

アだったことについての記載ですが、支援金も余り、補正予算も総会で「くむ」といっておいて組まず、「ボランティアはあくまでボランティア」という冷めたお考えで、千年に一度といわれた災害への対応をOT協会は反省して下さい。PT協会との温度差に失望しています（PT協会は交通費、支度金、車の購入など経済的な支援をしています）。また、ボランティアが途切れないよう総会でお願いしたのに「仕方がない」というお答えにはさびしく思いました。総会での約束は反故しないで下さい。

- ・現地コーディネーターのオリエンテーションがしっかりしており、各種団体から入っている各職種の人たちをうまく組み合わせ、活動の開始・終了時に報告、連絡、相談できる時間があったため、非常にやりやすかったし、実際にいろいろボランティアを気づかって下さった。
- ・現地県士会内でも人により考え方が違っているように思えた。他ボランティア団体と一緒にする場面もあり、OT協会や県士会という立場で動くことと軌轢を感じやすく、一人のOTとして判断、動くことをしていた。OT協会や県士会と他ボラ団体との間でトラブルがあったので、中立的立場でいないと難しかった。
- ・高齢者施設でのポジショニングなど、より重度で専門的な場面ではほとんど役に立てずに、申し訳ないと感じました。
- ・活動内容はどんなものでも構わないと思うが、せめて県士会なり協会なりが派遣して参加しているということが外部にもわかる形にして参加していないと、人によってはかなり辛いかなと感じた。
- ・支援者の中に、その者が去った後にトラブルが起こる（例えば自助具的なものの製作をするが一度も使用に耐えないなど）と、そのフォローで大変になる。ボランティアの水準をそろえることは難しいだろうし・・・解決策はないですが。
- ・日常の業務の中で、求められていないところへ訪問する経験があったことが役に立ったかなと思います。

《H23年11月～H24年2月》福島県派遣

- ・JDDネットで先に大学や心理士のボランティアをたくさん受けており、その方々の支援の流れに慣れていて現地支援員はあまりボランティア個人々人への細かな配慮に気づいていなかった。
- ・福島県は特に支援者の支援が大切であると感じたので専門職としての直接的支援だけでは足りないと感じた。
- ・サロン活動を行いました。事前に20分～1時間くらい1人で予防講話をすることなどを教えてほしかった。
- ・集まる人数にばらつきあり、内容の選択に苦慮した。

他のボランティアの方々が手工芸を教えに来た時に「助手」として指導することができた。「高齢者フォローアップ教室」ではパワーリハを行う前の体操という立場で行った。身体・福祉用具に関する質問を受けて返答することができた。

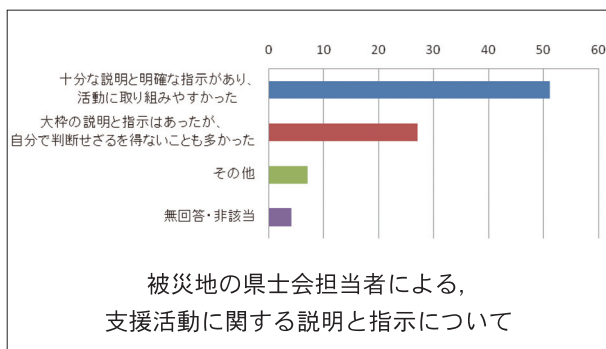
- ・南相馬市立総合病院のリハ科の人材不足も当時言われていました。また、在宅医療がどうなっているのかとても心配でした。そちらの支援は士会としてあったのでしょうか。
- ・現地の支援者へ気づきを伝えることは才能と感じた。
- ・協会から交通費と日当を支給すべきであった。他団体はそうされているところが多かった。（例：日精看）自己負担が多いと若いOTや遠方のOTが参加しにくい。資金については理事会等の事務費を回すのが一番良いだろう。（理事会等の会議費を節約すれば補えるのでは?）
- ・多くはサロン活動。特技の問題はありません。閉じこもり傾向の方への訪問やサロン活動の立ち上げに時間があれば対応してもよいと思う。

《H24年3月～H25年2月》福島県派遣

- ・現地のOTに負担をかけすぎです。協会のOTがコーディネーターをすべきです。
- ・アクティビティーを導入、実施してその時の時間を大切にすることも一つの目的ですが、継続した意味のある作業、さらには生産性のある作業をもっていけたらもっとよかったなあ、と反省しました。自分自身では"OTだからできることは多い"、"今とてもOTが必要なのではないかと感じましたが周囲に"OTはこういうことをしてくれるんだ"という専門性を感じていただくには働きが不十分だった気がします。

【Q21】被災地の県士会担当者による、支援活動に関する説明と指示について、「十分な説明と明確な指示があり、活動に取り組みやすかった」との答えが6割近く、「大枠の説明と指示はあったが、自分で判断せざるを得ないことも多かった」が3割だった。

Q21		回答数	割合
1	十分な説明と明確な指示があり、活動に取り組みやすかった	51	58.6%
2	大枠の説明と指示はあったが、自分で判断せざるを得ないことも多かった	27	31.0%
3	その他	7	8.0%
4	無回答・非該当	4	4.6%



その他として、指示はあったが混乱していた、という意見があった。

《H23年4月～5月》宮城県派遣

- ・県士会員同行で活動した。
- ・県士会の代表者はたまにしか来ることができない中で、現場の状況は刻々と変化します。現場にいる県士会員やボランティアにある程度決定権があると、他職種とのやりとりもスムーズに行き、取り組みやすかったと思われる。
- ・指示は頂けたが、活動内容全体が（どの職種のボランティアも）確立されておらず目的が定まらない印象であった。

《H23年6月～9月》宮城県派遣

- ・説明はあったと思いますが、他団体（東日本大震災リハビリテーション支援関連10団体、以下、リハ10団体）との関係など、自分の立ち位置をつかめず戸惑いながら取り組んだ感じです。
- ・リハ10団体のPTOTが先に入っていたので、指導してもらったり、一緒に考えたりしながら対応した。

《H24年3月～H25年2月》福島県派遣

- ・県士会担当者との接点はありませんでした。

Q22 Q21で「大枠の説明と指示はあったが、自分で判断せざるを得ないことも多かった」と答えた人が、具体的にどのように対応したかについて、①他団体の人と役割分担を決める②現地コーディネーターと連絡を取りながら判断した、という意見が多かった。現地ではボランティア同士が最善と思われる方法を考えて、実行したようだ。被災地の現状を考えれば十分な説明と明確な指示がないことは仕方がないし、ボランティアが考えて行動する必要があった。また、現地コーディネーターが不在や、現地のスタッフに支援内容を聞いても何を依頼するか困惑しているという状況もあった、との意見があった。《H23年4月～5月》宮城県派遣

- ・初日アンケート調査をしたが、簡単なまとめと翌日の動き（調査の人の選別、対応する人の検討、followした方がいい被災者）を協会ボラで同行した人と行った（宿泊施設で）。
- ・現地で他団体の方とミーティングをして役割分担を

明確にして少しずつ進めた。

- ・福祉避難所開設にあたり指示はなかった。現地について「開設」と知り、必要な支援や支援方法、スタッフとの役割分担を考え行った。現地担当者が震災以来、初めてお休みをとる時と重なり、情報収集が難しく、とにかく「つなぐ」ために活動した。
- ・在宅の被災者が避難所を転々としていたり、流されて家自体が消失していたこともあった。訪問できなかった家もあった。（現地に入ってみないとわからないという状況だった）
- ・初日のオリエンテーションは1です。事前の説明はQ12に記載した通りです。

《H23年5月》岩手県派遣

- ・現地もばたばたしており、自分たちの関わりがどこまで許されるのか？判断しにくかったが、とにかく考えるより行動で判断してしまった。

《H23年6月～7月》岩手県派遣

- ・次週に来る隊のみなさんへの申し送り方法について
- ・現地ではボランティア同士が最善と思われる方法を考えて、実行したように思えます。被災地の現状を考えれば十分な説明と明確な指示がないことは仕方ないし、ボランティアが考えて行動する必要があったと考えます。
- ・わかる部分とわかりにくい部分があり、専門分野も違うので、ペアのOTと組んで、相談しながら対応した。その日の報告で確認し、やるべき方向性を再確認しました。

《H23年6月～9月》宮城県派遣

- ・被災状況がひどく、指示された道順が使えないなどあり、その場の状況で判断。支援内容については概ね現地スタッフより指示。
- ・事前の説明は、一度行っている所であり、又、県士会担当者の動き方もわかっていたので、困らなかった。（初めての人はとまどったと思う）前任者からの引継ぎが開始されており、注意点等事前に確認できた。
- ・避難所内で動きは現地PTや他団体のボラの動きを見て、又は指示・依頼を受けてボラをしていた。常に現地PTとの連絡をとるように心掛けていた。
- ・必要な材料などを私費で購入した（何度も買い物に行けない）。
- ・担当者へ電話などで内容確認させて頂くことがありました。そういったフォローがなければひとつひとつの判断が遅れていたと思います。
- ・県保健福祉事務所からの要請であったため、県士会担当の方より資料を頂き、具体的説明は現地スタッフより受けた。

《H23年11月～H24年2月》福島県派遣

- ・現地の県士会や協会本部の人はおらず、市職員と会

話したのは最初の2,30分くらいだった。

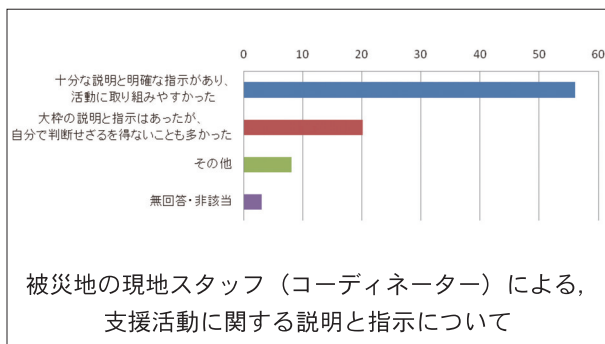
- ・オリエンテーションはあったが、働く場は別で、現場で解決した方がいいと判断しました（南相馬のAさんが県士会担当者なら）。
- ・現地の方は身体的な活動はあまり望んでいない、楽しみの方が希望があった。
- ・これは当然のことで現地の担当者も業務があり、生活がある。ボランティア担当者を協会から派遣すべきだった。
- ・現場の担当者と意見交換や質問をしたりした（しかし、お任せします、が多かった）。

《H24年3月～H25年2月》福島県派遣

- ・私の派遣された週から訪問活動が開始されたため、包括スタッフと同行する際スタッフも何を依頼するか困惑している様子であった。対象者のニーズで包括スタッフのニーズをすり合わせる対応を行った。
- ・勝手に判断して遊具を作成した。大まかすぎた。
- ・現地のOTが調整してくれたが、多忙でかえって負担をかけていた。コーディネーターこそ協会から派遣すべき。
- ・自分で全ての面で判断し行った。ボランティア後の活動報告だけの指示はあった。

【Q23】被災地の現地スタッフ（コーディネーター）による、支援活動に関する説明と指示について、「十分な説明と明確な指示があり、活動に取り組みやすかった」が64%、「大枠の説明と指示はあったが、自分で判断せざるを得ないことも多かった」が23%だった。

Q23	回答数	割合
1 十分な説明と明確な指示があり、活動に取り組みやすかった	56	64.4%
2 大枠の説明と指示はあったが、自分で判断せざるを得ないことも多かった	20	23.0%
3 その他	8	9.2%
4 無回答・非該当	3	3.4%



その他として、宮城県派遣では、現地コーディネーターからの指示はほとんどなかった、との答えがあった。

《H23年4月～5月》宮城県派遣

- ・ほとんどなかった。市の職員がお休みに入ったため。
- ・県士会員同行で活動した。
- ・5/14活動地は現地の保健師さんがまとめているとのことであったが、ご多忙であり、コミュニケーションがとれなかった（不在だった）。

《H23年6月～9月》宮城県派遣

- ・前任者との引継ぎが現地ですでにとよりスムーズに活動を開始できるのではないと思いました。
- ・活動期間中、一度訪ねて来られてあいさつをした程度。
- ・特に現地コーディネーターらしき人がいなかったと思う。

《H23年11月～H24年2月》福島県派遣

- ・現地スタッフも私たちの扱いに戸惑っている感じがかった。

【Q24】Q23で「大枠の説明と指示はあったが、自分で判断せざるを得ないことも多かった」と答えた人が具体的にどのように対応したかについて、コーディネーターには十分な説明をもらったが、それ以上に、個々様々な状況が多く、ボランティア同士で相談してコーディネーターに連絡した、自分の判断を共有できるようにし意思統一した、との意見があった。また、現地スタッフもお任せという感じで、現地に入ってから自分から提案し、行ったことを書面に残すなどした、という答えもあった。

《H23年4月～5月》宮城県派遣

- ・ボランティア同士でミーティングをかさねて、何を求められているか考えながら意志の統一をして行った。
- ・コーディネーターのOT像と自分のOTがかけ離れすぎていてどう動いて良いのかわからなかったが、目の前に対象者がいて困っていたので、環境アダプティス、足台作り（その場でできること）をした。
- ・現地スタッフは交代制のため、一週間毎日いるボランティアの方がその期間の状況は把握しやすかった。状況は日々刻々と変化するため、ボランティア自身で判断して動くことが必要だと感じた。

《H23年6月～7月》岩手県派遣

- ・コーディネーターには十分な説明をいただきましたが、それ以上に、個々様々な状況が多く、ペアで活動したOTや別行動した隊員と相談したり、難しい場合は、コーディネーターへ電話した。1人でため込まず1人でもOTでなくても自分の判断を共有するように努めました。
- ・継続支援者に対する今後の継続、終了について、その場でアプローチする視点など。
- ・実際に動いてみて何度か確認した。現実には伝えられる量はその時に現地の方が持っている情報として

結構多かったのではないかと終わってから感じます。
 ≪H23年11月～H24年2月≫福島県派遣

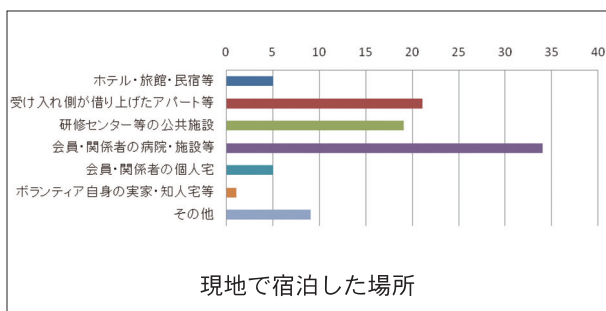
- ・求められそうなこと、押しつけにならない程度に行った。
- ・これは当然のことで現地の担当者も業務があり、生活がある。ボランティア担当者を協会から派遣すべきだった。
- ・現地スタッフからはお任せします、がより多く、現場に入って自分から提案させていただいたり、被災者の方々、お年寄りたちの反応を探って対応した。自分は短期間で帰ってしまうためなるべくご自分たちでできるようなもの、また自主練習方法も提案させていただいた。また、申し送りプリント（現地スタッフさんへ）を作成した。
- ・個別指導、運動メニュー提供が求められた。リスク管理が難しかった。

≪H24年3月～H25年2月≫福島県派遣

- ・口出しだけするベテランOTに現地スタッフはこまっていたようです。
- ・特に問題はなかった。

【Q25】 現地で宿泊した場所について、参加者の40%が「会員・関係者の病院・施設等」、24%が「受け入れ側が借り上げたアパート等」、22%が「研修センター等の公共施設」に宿泊していた。

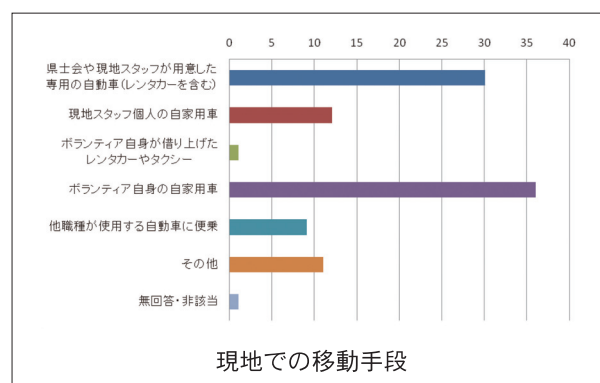
Q25		回答数	割合
1	ホテル・旅館・民宿等	5	5.7%
2	受け入れ側が借り上げたアパート等	21	24.1%
3	研修センター等の公共施設	19	21.8%
4	会員・関係者の病院・施設等	34	39.1%
5	会員・関係者の個人宅	5	5.7%
6	ボランティア自身の実家・知人宅等	1	1.1%
7	その他	9	10.3%



その他として、活動場所である福祉避難所などが挙げられた。

【Q26】 現地での移動手段について、参加者の4割が「ボランティア自身の自家用車」、35%が「県士会や現地スタッフが用意した専用の自動車（レンタカーを含む）」であった。

Q26		回答数	割合
1	県士会や現地スタッフが用意した専用の自動車（レンタカーを含む）	30	34.5%
2	現地スタッフ個人の自家用車	12	13.8%
3	ボランティア自身が借り上げたレンタカーやタクシー	1	1.1%
4	ボランティア自身の自家用車	36	41.4%
5	他職種が使用する自動車に便乗	9	10.3%
6	その他	11	12.6%
7	無回答・非該当	1	1.1%



その他として、以下のものがあつた。

≪H23年6月～9月≫宮城県派遣

- ・仕事中は移動なし。入浴や買い物は5（他職種が使用する自動車に便乗）。

≪H23年6月～7月≫岩手県派遣

- ・ペアで動いた隊員の車。

≪H23年11月～H24年2月≫福島県派遣

- ・協会が用意したレンタカー。

≪H24年3月～H25年2月≫福島県派遣

- ・協会の用意したレンタカー。
- ・現地スタッフの自家用車。
- ・今回は送迎してくれたので楽だった。

【Q27】 現地での宿泊施設や移動手段に関して、気づいたこと、問題点、要望の自由記載について、宿泊施設については県士会の協力もあり、環境はよかった、との意見が多かった。避難所で宿泊した方は、一緒に生活することで、問題点も見つけやすかったという意見もあり。福島では、ワンルームで初対面の人が生活するのはつらいという意見があった。移動手段はどの地域も宿泊施設から現地まで遠く、運転が大変だった。道路が分断されていたこともあり、道路状況の情報がほしかった。運転については事故への注意が必要、との意見があった。

≪H23年4月～5月≫宮城県派遣

- ・県士会の方の協力でとてもありがたい環境で生活できました。絆の大切さを感じられた。
- ・宿泊施設までは電車が通っており、現地での移動は県士会OTの車に同乗させて頂いたので困ることは

なかった。宿泊施設についても横にコンビニがあり、食事水なども困ることはなかった。

- ・移動時に現地の車とぶつかり事故がおきた。雨、少ない照明など状況も悪かったが、注意が必要と思った。病院で検査する等1日（翌日）がムダになってしまった。
- ・県士会の方々、よく心遣いして下さったと思う。
- ・活動地と宿泊地が離れていることはしかたがない。民間の浴場があり助かった。
- ・道が分からずボランティアさんが事故を起こされたお話を伺いました。自家用車でしか迎えない地域も多かったのが、事故を起こしてしまった際の対応も確立されるべきかもしれないと感じました。
- ・移動に2時間以上かかっていたが、内陸部の比較的安全な場所に宿泊施設があり、適切だったと思う。
- ・暖かい部屋に布団、洗濯が自由にできる設備…ここを避難所にすればいいのに、という思いもありました。
- ・現地OTの御実家に宿泊させていただき、ありがたかった（活動場所に近く、スーパーもあり、寝具や暖房、湯わかしポット等準備していただき、生活する上で困らなかつた）。

《H23年5月》岩手県派遣

- ・宿泊所のOT室は病棟と別棟であり、職員寮のシャワーを使わせていただくことができたため、とても快適に過ごすことができました。
- ・現地が狭い駐車スペースを利用することが多く、特に学校の駐車スペースを利用した折に、切り返しなどで苦労しました。宿泊施設は、現地の方の心使いを感じられることが多く、大変快適に過ごすことができました。
- ・宿泊施設から現地まで距離が少々ありすぎる。空いていて30分、朝はボラ車で1時間30分かかった。
- ・先発隊によってあらかじめ現地の交通情報や移動方法など知らされていたので苦労はなかった。

《H23年6月～7月》岩手県派遣

- ・車は必要。
- ・移動手段が自動車ですので、免許をもっていて自家用車を持っていない会員の協力をもっと募ってもよかったのではないかと思います。
- ・仕方ないことですが、現場と宿泊した場所が遠かったので、通勤が大変でした。（1時間）
- ・無事に済んだが、タイヤに釘が刺さっていたまま岩手から横浜に帰ってきた。現地から帰る時に車両点検すればよかった。
- ・宿泊先のOTの方がとても配慮して下さっていたと思います。そういった支援あって活動ができるんだと実感した。
- ・宿泊した病院では十分配慮していただき、ボランティ

ア活動に支障なく動けたと考えています。自家用車での活動だったので、現場の道路事情が悪くて、ぶつけたとしても自己責任との思いだったので、気楽に運転できました。今はカーナビ標準装備なので、訪問先は名称だけでなく、住所や電話番号を教えていただけると、円滑に目的地にいったと考えます

- ・宿泊施設となった病院の方にもとても親切にしてくださいました。
- ・現地での対応は良かった。
- ・十分対応していただきました。
- ・宿泊施設は施設内の備品など快く貸していただき、本当にありがたかった。実際には、難しいとは思いますが、もし可能なら派遣先に近いところで宿泊できたらもう少し全体に長く活動できたのかなと思っていました。

《H23年6月～9月》宮城県派遣

- ・今回は車の運転にかなり応用力を要した。（毎日、往復3時間高速道路を使った移動、現地はがれきが殆どで道路寸断などあり）宿泊施設は何箇所もあり、情報の整理が必要に感じた。そういった作業は現地県士会の方々が行うには限界があり、事務局の方が中心となってボランティア経験者も少しは力になれるのではないかと考えた。
- ・移動に30分程かかったが、入浴も出来、助かった。
- ・宿泊施設は入浴もでき快適でした。県士会にレンタカーを用意していただき（ナビつき）移動も問題ありませんでしたが、道路の情報はナビ通りではないところもあったので、現地で地図（通行止めなどの情報のある地図）を購入し、活用した。
- ・用意していただいた宿泊施設は申し分なくありがたかったですが、支援場所の体育館などでもよかったと思います。もう1名の方と支援地が同じ方向だったので、レンタカーは1台でよかったように思います。
- ・福祉避難所で生活を共にしたことで、避難者の実際の生活を目の当たりにし、住環境や余暇の過ごし方、ADL、精神的ストレスなどなど知ることができ、現場で対応できた（限界も知った）ことは本当に貴重な経験となった。現地コーディネーターの関与が気仙沼と違っていたのでとまどったが、他団体と協力し合いながらすすめていく大切さも知った（他の時期のボランティアはこの点で苦労している人も多かったと聞く）。
- ・十分すぎる設備が整ったホテルでした。県士会でレンタカーを一週間借りていただきましたが、その費用にびっくりしました。自分の車で行けなくて申し訳なく思いました。
- ・充分すぎる対応をしていただきました。

《H23年11月～H24年2月》福島県派遣

- ・先に心理士さんたちが入っていたのでノートに申し送りを書いてくれていて役立ったが、顔を一切合せなかった。できれば現地で顔を合わせて直接引継ぎをしたいと思った。レンタカーを一人で運転して初めての土地で動き回るのはナビがあるとはいえ、車も初めての車で戸惑うことが多く、非常にストレスを感じた。
- ・情報が細かく、事前に分かっていたので助かった。
- ・今回一緒に参加したOTの車で移動でき、大変助かった。雪で4WDでないと移動できなかった。
- ・日当たりもよく、きれいなアパートでした。2人いたのもう一間あればいいと思いました。
- ・宿泊施設は1ルームでそこに全く初対面の2人が生活するのは少し辛いところもありました。
- ・宿泊については前任者の置いて行ったものがあり困ったことはなかった。
- ・レンタカーが使えたことはよかった。

《H24年3月～H25年2月》福島県派遣

- ・前の週末までのOTが残した食料があり、大変助かりました。協会の借りたアパートでしたので物品（冷蔵庫、炊飯器等）も協会の購入物品だったのででしょうか？日誌を印刷するためのプリンターやインターネット環境があると次の日のアプローチの準備ができるのではと感じました。
- ・プリンターはあった方がいいかも。
- ・移動の足がなく、食料調達も範囲が限定され不安感があった。
- ・避難所にいっしょに寝泊まりすることで日々の暮らしで困っている点などを発見しやすく、また、共感しやすくよかったと思いました。

(4) 災害支援ボランティア活動を経験して

【Q28】「災害支援活動」にどのようなイメージをもって臨んだか、事前にイメージしていた活動と実際に行った活動との異同や、もしイメージ通りでなかった場合はその具体的な違いなどについては、岩手県では、「現地での支援システム」や「コーディネーター」が整備されており活動を行う上で保健師との連携など上手く機能していた、という意見が多い。宮城県派遣では、とにかく自分にできることがあればと思い、参加した、との意見が多かった。現場にいかないといけないことが多いと思った、との意見もあった。また、コーディネーターの重要性（行政に籍を置くセラピスト）を感じた、との意見、内容については、専門性を活かし如何に困っている方の生活を支えるかが重要だと思った、直接的な関与より環境調整などが多く求められた、との答えだった。福島県では「介護予防」や「レク」などの集団指導が多い、との答えだった。

《H23年4月～5月》宮城県派遣

- ・OTとして参加したつもりでしたが、必要とされることが一般の方も含まれるので本当に大変ななだと思いました。震災から一か月と日が浅く、リハビリは考えられない方が多く感じた。精神的ショックで動作ができなくなっている方も多く、話を聞いて簡単な動作指導でADL自立となる方もいました。可能ならばもう少し参加したかった。
- ・何かしらの能動的活動に取り組みさせていただくことで、被災地の力になれば、というイメージで望んだ。しかし、2日間と言う短期間、冠水などの影響も考慮しなければいけない状況で、パイロット的活動のため移動も多く、県士会の方々に同行させて頂くばかりであったため、何のお役にも立てなかったのではないかと、という想いが強く残った。
- ・具体的に活動をイメージすることができないまま参加したが、とにかく自分にできることが何かあればと思い参加した。活動の継続性などを考えると、現地県士会などの求められるものができれば良いと思うが、避難所など人の移動が多い中で、その時点での情報を少しでもたくさん集めることが一番求められることなのかなと思った。
- ・OTとしての支援活動は現地で生活されている方の状況を見せて頂きながらアドバイスすることはイメージと変わらなかったが、避難所に支援で入っている団体がバラバラに活動しており、協働できれば同じ方向性をもった支援ができると考えました。
- ・何が起ころうか分からないイメージ。でも、OTを用いて何らかの結果を残したいという思いもあった。実際に行ってみて、何をすべきか、または何を求められているか手探りだったのでとても悩んだ。OT的な直接的支援が出来そうでも、すぐに出来なかった。現地の他団体のボラスタッフとコミュニケーションが足りていなかった。また、OTをする目的でボラに来たという人も中には数名いた。
- ・「被災者とともに寝起きしながら過ごす」イメージをもって行きました。活動場所は2か所で、それぞれ立場や活動場所も全く異なるものでした。どのような状況も起こりうるし、受け入れる覚悟でのぞんでいたため、また、初めて災害支援活動を経験したため、イメージと異なるとは思いませんでした。予想外だったことは、支援団体が（GWということもあり）多く、どのように役割分担をするか等打ち合わせが必要だったこと、そのための待機が必要だったことです。もどかしい気持ちを抱きながらもできることを探し、協力し合えたことはよかったと思います。
- ・対人のイメージであったが、環境づくりの時間が多く裏方の活動が多い感じがした（始めは）。全体の

イメージを把握して、自分の立ち位置を理解できてからようやく自分らしいOT活動ができた。

- ・リハ10団体のボランティアのメールを見て応募していたため、県土会のボランティアでも他団体と協力して行っているイメージで臨んだが、実際には各々でバラバラの活動をしていた（OT士会、PT士会、Ns（前病院スタッフ）、ボランティアの他職種団体（OT、PT、Ns、福祉等）、Dr、歯科衛生士、福祉系ボランティア等）。そのため、上手く協働できる体制作りから始める必要があった。
- ・被災地なので、個別リハどころではないとイメージしていた。「何でも屋」になろうと思っていたので、雑用が多くてもイメージ通りだった。
- ・自分が本当に役に立てるのか不安に思いながら、多少ミーハー的な気持ちがあったのも正直なところだが、参加してみて役に立てたかどうかはわからないが、やはり現場にいかねばわからなかったことがわかって行ったことは良かったと思う。もっとOTとしての能力を求められるのかと思ったが、そうでもなかった。
- ・被災後2か月で活動を行ったが、現地スタッフにボランティアを適切に配置していただき円滑な行動ができた。コーディネーターの重要性（行政に籍を置くセラピスト）を感じた。
- ・当時、何でもよいので何か自分にできることをしたいと感じ、せっかくなら専門知識を生かせるOT協会のボランティアに登録しました。しかし、実際に現地へ伺うと、福祉的避難所にはボランティア（様々な職種の）が集まり（利用者の数を超える）、責任者不在、人はどんどん入れ替わるなど、かえって利用者さんを不安にさせ、つかれさせてしまうのではと感じました。結局、ためになることができたとは言えないです。
- ・災害支援活動は3回目だったが、OTとしては初めてであった。自分自身の知識や技術が少しは役に立ったような気がする。被災地に入り、自分の目で行動で状況を確認められたのは、自分にとっても大きい。
- ・以前にも雲仙等で行っていましたので、イメージとの差異はありませんでした。
- ・自分が行って役に立つのかという不安が大きかった。しかし、行ってみて生活面での心配がなかったことと現地コーディネーターの十分なオリエンテーションや、ぶれない姿勢があったため不安なく、できることを考えながら対応させてもらえ、学ぶことも多くあった。

《H23年5月》岩手県派遣

- ・イメージが無かったため新潟県中越地震、阪神淡路大震災の活動報告を見て情報収集を行いました。しかし、現地に入ってから実際の被害状況を目の前

にしてただ圧倒されました。今後のためにも今回の活動記録や写真などを協会から発行し、フリーアクセスできるとよい。

- ・元来阪神の災害支援などでパンの配給など、一般の方が行う活動をしたことから、OTとしての専門性を活かせるとは思っていませんでした。しかし実際に現地に入ると「現地での支援システム」が良く整備されており、リハの専門職として、保健師とも連携した活動が出来たものと思います。何より「現場」が求めているものにしたがって動くことを誤ると余計なことをしてしまうことにもなると思います。
- ・事前に活動していたOTからメールで情報をいただいたので、イメージしやすくまた、活動もしやすかったです。現地のコーディネーターがさりげなく心遣いして下さり大変貴重な体験をさせていただきました。
- ・事前にイメージもつかず、何をするのかもわからずの参加であった。しかし、現地ではOTとして基本から考えさせられる内容で勉強になった。
- ・現場についてはコーディネーターが全て指揮してくれたので、事前に必要な支援が行える体制でした。コーディネーターからの指示内容は日々のリハビリから応用できる内容でしたが、実際に現場に行くと、ご本人様、ご家族様からニーズを聞きだすことが困難でした。（気を使っていることがわかった。）
- ・OTとして専門的な技術や知識を活かそうとするのではなく、自分にできることなら何でもする、させていただく、という気持ちでないとOTの押しつけになってしまうと感じた。
- ・思った以上に慣れない業務によるストレスがあった。がれき処理などの肉体労働もそうですが、対象者の心理面や健康面、環境面を整えるボランティアもかなりの体力、精神力が必要となることがわかりました。
- ・現地で困っていることを手助けすることをイメージしていた。実際に活動してみて、訪問リハビリのイメージに近い印象。連携はあまり考えていなかったが、実際は、保健師や災害医療チームとの連携が大事ですごく機能していたと行っていて感じた。

《H23年6月～7月》岩手県派遣

- ・活動後のフィードバックが多く受けられると思っていたので、自分自身の活動がどう作用したのか知リたかったが、実際には活動しっぱなしであり、行ってよかったのだろうかという疑問が残った。活動自体のイメージはDMATのような組織体制だった動きをイメージしておりましたので、個人の判断に任せられる部分が多いと感じた。
- ・少しでも役に立てば、という思いで参加した。何でもやるつもりだったので、イメージというイメージ

はなかった。

- ・活動前のイメージは避難者生活に起因する身体機能の低下者に対して、廃用予防、環境、動作の工夫などの提案、内容については一部イメージは変わりませんが、自分たちで完結せず、情報はつなげることがとても大切でした。また、心身機能のみでなく、衛生面、栄養面を含めたリスク管理も大切でした。
- ・OTとしての関わりよりも雑用的なことや環境調整などができることかとイメージしていたが、参加させてもらった3か月後という時期は避難所での生活はそれぞれの方がそれぞれの生活スタイルが出来上がっていた。また、仮設住宅へ移られる方も多く、その時期に重ねて訪問できれば、家屋調査や閉じこもり予防ができるのかと思いました。
- ・単純にリハビリ活動だけに従事すれば良いとの思いはありませんでしたが、思った以上に多岐に渡る活動だったと感じます。心の医療チーム依頼による職員対象のリラクゼーションを行うことになるとは想像しておらず、その場での判断や対応力というのが必要な現場と感じた。また、6月ということで、やや落ち着いたということもありますが、リハのニーズがもっとあるものと思いましたが、そこまでなかったという感じでした。そこそこの対象者に対して落ちていて援助が出来たと思います。
- ・持っていたイメージは何でも屋でした。力仕事でもなんでも求められたことをやるつもりで行きました。実際行って見て、コーディネーターの方に災害支援でのOTの役割を整理していただけたので、OTとしての活動に特化して取り組む事ができた。活動の中では、7月という仮設住宅移行期で、改修や福祉用具の選定が多かった気がします。ただ、単体で訪問していたため、考えた案を誰につなげばよいかわからなかったことがありました。あのような場所での情報共有は難しさを感じました。
- ・震災から4か月経過した時点での災害支援活動だったが、身体のケアでできることは少なかったが、精神的なケアがまだまだ必要と感じた。
- ・事前の災害支援活動に対するイメージは本来の職種以外の仕事も要求され、それに臨機応変に対応する必要があると思っていた。しかし、震災発生から4か月経過していたためか、OTの活動が主であった。
- ・何をしたらいいかわからず応募したが、派遣先では組織がしっかりしていて驚いた。震災から時間がたっていたこともあるだろうが、物理的にも人的にももっと混沌としていると思った。
- ・事前のイメージは特になくというかTVの中のことでしかなく、ただできることをと、思って臨んだ。実際には、ボランティア活動も終盤になり、自分のチームで県外派遣が終了のはずだったので、傾聴の

部分が多く、それを求められていた気がした。また今日で終わりにしようかという役割もあり難しい判断だとも感じた。

- ・身体的に急性期の方の治療的なことが必要とされているイメージを持っていた。(ケガ) 実際には、そのような知識よりも被災者の方によりそのような心のケアや自立して生活していくための具体的な物的援助や心的援助の方がより必要だと感じた。

《H23年6月～9月》宮城県派遣

- ・はっきりイメージができないままで行ったので、少しとまどうこともありましたが、しかし、あの状況なら行ってやれることを探すしかありませんし、仕方ないかと。
- ・イメージ通りでした。応用が必要で、専門性をいかし、いかに困りの方の生活を支えるかが重要だと思いました。
- ・前回、福祉避難所ができる旨を聞いており現場も見に行ったりしていたので、そちらに派遣されるイメージでいたが、別の派遣先で全く違った。おそらく災害支援活動として一番イメージしやすい内容の派遣先であったように感じる。
- ・初めて参加する人がとまどっているのが気になり、わかる範囲でフォローに努めた。現地コーディネーターを少しでも助けることができればと考えることが多くなった。
- ・行って見て被災地(者)のおかれている状況は時期や場所などで違いが大きいとわかりました。先に行った方の報告書を読み、活動内容が様々だったので自分はOTとして何ができるか不安でした。実際OTらしいことはほとんどしないまま帰ってきたように思います。
- ・福祉避難所ということもあり、比較的恵まれた環境だと思いました。4月に入った時はダンボールのベッドがあってもサイズが合ってなかったり、必要そうな人になかったりと不十分な点があった。7月ではその頃に作製されたものの修繕だった。3か月たっても十分でないこともあり、TVの報道より復旧が進んでいないと思った。仙台市内と沿岸部の復旧の差も驚いた。一般の避難所では空調設備が整っておらず、高齢者は本当に大変。報道はいい面ばかり日が経つにつれて流すが、現場は千差万別。状況が異なり、自分の目で見て体験しないとわからないと感じた。
- ・現地コーディネーターの関わり方で、ボランティアは活動しやすさが大きく異なることがわかった。被災者の生活や本音に触れる機会が多くあり、学びも多かった。
- ・特にイメージしていなかったです。求められることに対応しようと考えていました。

- ・被災半年後の派遣だったため、予想通りほとんどは身体障害領域のOTの活躍できる内容が多かったが、若干の精神科の専門性が活かされる場面もあり良かった。でも専門性をいかせる業務があればもっと貢献できたと残念。時期により求められる支援が異なるのでニーズ把握、マッチングがポイントだと思う。
 - ・現地で申し送りを受けるまでは、個別的な対応やいわゆるリハビリの専門性がつよく求められるかもしれないと思っていましたが、前任者からの申し送りを通じて、対象がコミュニティや環境であったり、リハビリとしての視点は要所で生かす、というニュアンスであることはイメージできました。ただし、支援内容は実際（現実的）に幅広いですが、ある程度シンプルに焦点化して提示して頂く方が支援をする側も迷いなく自身の達成度の把握ができると思います。
 - ・3度目であったため、「災害支援活動」の内容が多彩であるということがイメージできていたように思う。活動内容がどういった位置づけにあるのか、ということは現地で説明を受けるまでよく分らなかった。
 - ・二回目でしたが、特にイメージしていなかったです。
- 《H23年11月～H24年2月》福島県派遣
- ・今回は登録後の人選、時期の決定に当たり、性差や経験、年齢などを配慮されたいが、私の場合急ぎょ今まで医療職の入ったことのない「特別支援学級」に初めてOTが入るということでSTのキャンセルの枠に決まったらしい。非常に責任を感じてしまった。結果的にたぶん、学校の先生たちには良い印象で受け入れていただけたと感じた。責任が重かった。
 - ・放射線対策を調べていったが現地の人はそれほど気にしていなかった。
 - ・福島ということで放射線量の不安がありました。実際には現地で生活している人たちはもっと不安であると感じ、少しでも力になりたいと思った。実際の活動では、児童デイは、OTというより現地スタッフのサポートに徹したのでよかったと思う。寄り添い型の支援が大切です。特別支援学級で発達OTとしての専門性がフルに求められ、予想より忙しかったですが、勉強になりました。
 - ・そこに行かなければ感じる、気づくことができないと痛感しました。まずはそこにいる人たちと話を、必要だと思うことをするにつきました。
 - ・災害後、1年近く経ってからの活動であったので、一見日々の仕事のような（職場や対象者が異なるだけの）気もしましたが、会話の端々に災害、被災を感じました。現地スタッフのほぼ全てが同じ被災者であるということも考えさせられました。
 - ・セラピストが関わる支援ということで、仮設住宅で

過ごしている障害を持った方々に関わるものと思っていましたが、今回の関わりはどちらかというと「介護予防」がメインという感じだった。しかし「予防」という観点でも体操やレク、動作指導などセラピストが関われる分野は非常に多いと思った。

- ・作業療法士という専門職がそのまま生かせるわけではないと考えていました。配置された活動は仮設住宅のサロン活動で、社協の生活支援相談員さんと共に働きましたが、作業療法士の経験をそのまま生かすことができたと思います。ただし集団を相手にする活動経験がなかったら難しかったと思います。
- ・OTとしては、活動に出てこない住民の生活が気になる。
- ・たくさんありすぎて書いてまとめるのは難しい。協会への注文：とにかく協会から現地にコーディネーターを送り込むこと。現地や県士会は大変なのに視察的協会役員ばかりウロウロ入り込んだと聞いている。実務者を早く送って対応させるようにすべき。それともっと金を出すべき。
- ・OTとして専門性を活かした活動を想像していたが実際は体操のお兄さんのようなものであった。災害支援においてOTができることや、やるべきことを深く考える機会としてボランティア集会はよい機会と思う。
- ・様々なシステムが混乱している中で活動を行うイメージを持っていた。しかし実際はご自分たちで努力してシステムを作り上げておられた。混乱はあまり感じなかった。そのシステムを壊さないように自分たちがお手伝いできることをし、それがもとで何をしたら良いものになっていただければという気持ちで活動した。
- ・主に集団との関わりが中心だった。OTとして専門性を十分に発揮できなかった。

《H24年3月～H25年2月》福島県派遣

- ・震災後一年を経過しての支援活動でしたので生活不活発の予防を第一にイメージしていました。サロンやデイサービスといった集合の場に出られる方へのアプローチは比較的行いやすかったです。しかし訪問活動では包括スタッフにまずはOTの役割を伝えることから始まりました。派遣先が元々OT過疎地域であったことが原因であったと感じます。サロンは各々立ち上がりの時期も違い、顔なじみで自治活動も毎朝行う成熟度の高いところもありました。段階付けしたアプローチの必要性を感じました。デイサービスでストレッチを行った際、お金を渡されそうになり断ったのですが聞けば週に何度か有料の整体師が来ているとのことで、考えさせられる出来事でした。

- ・環境は整わないものの人は立ち直っており、動いていた。子供たちはもっとタフでどこでも同じ遊びたい子供たちだった。こちらが教えられた。
- ・現地と自分の居住地との温度差にびっくりしました。
- ・今回私が参加した活動はOTとして役割があったので、複数のOTが関わる数か月の時間の中でその役割が達成できること、またひとつひとつの出会い、場面で何らかの答えを出すことが求められていると思って臨みました。災害発生から1年経ってからの活動でしたので今の状況を素早く把握し求められた役割を果たし、後に続くように根付く道筋も残すことも必要でした。（個人的な思いや何かをしたいという漠然とした思いだけでは迷惑であり、実際にもそうだなと感じました。）
- ・イメージでは、自宅を家族を失われた精神面に関するフォロー。また環境が変化し中での身体機能低下や生活環境の調整指導等。実際に活動してイメージと大きな違いはなかった。
- ・日常を取り戻すことへの支援が重要。
- ・一回行っただけでは結果や影響について確認ができず、二回目以降に再訪してやっと確認、納得することができた。継続して初めて終われた気がする。
- ・2回目の支援だったのでイメージができていた。

【Q29】 災害支援ボランティア活動を通して、自身のOTとしての「学び」になったことについて、他職種との連携の必要性和県士会同士の関わり、リハ職同士や行政などとのつながりは災害が起きて急に出来ることなく、日頃から必要である、ということ。生活を支えるOTだからこそ多くの視点にたって支援できることが沢山ある、ということ。その場限りに終わらず関わり続けることが大切（次の支援者につなぐ）、という意見があった。その他福島県では、「予防事業にセラピストが関わる有効性」や「支援者の支援」など具体的な項目がみられ、集団活動が大変だったが、学びとなったという意見あり。

《H23年4月～5月》宮城県派遣

- ・「作業療法士」としてではなく、「人」として活動すること。災害の現場の状況を本当に知ること。何もできないこともあるということ。
- ・当事者への想像力、これにつきます。
- ・情報の共有、普及などの重要性。多職種との連携、情報共有。OTの知識や専門性も避難所などの災害初期からの介入が重要であり、かつできることがたくさんあること。
- ・避難所の環境を整えることで「生活不活発病の予防」をするという目当てで動いたのであるが、本人の身体機能云々というより「動きやすい環境」さらに「動くように誘導される環境」を作ることが大切で

あると現場で知ることができた。

- ・普段の仕事柄、個別に対象者の方と関わる人が多いので、つい一人ひとりの住民の方に話しかけたり、杖を使用している人、シルバーカーを使用している人により個別的な関わりをしなくなってしまうですが、生活不活発病予防・改善の関わりを通し、環境の整備（図書コーナーの設置、靴箱の設置、談話コーナーの設置、くつの整理、ゴムシートがめくれないようガムテープでは等のこと）で、住民の方の動きや流れを作ることができるのだということがわかりました。避難所の雰囲気も環境的な要因（明るさ、窓が多い少ない、洗濯場のあるなし、洗濯物を干す場所があるなし、調理場のあるなし）で大きく変わることも気づきました。
- ・他部門との協働。医療人として、全ての知識を活用できた。（バイタル、ナラティブ、福祉用具調整、ADL指導など）求められることに対し、即興で対応する必要性を感じた。
- ・県士会同士の関わり、リハ職同士や行政などとのつながりは災害が起きて急に出来ることなく、日頃から必要であるということ。パーツを診るのではなく、全人的な関わりができるOTは正に必要だ、と改めて感じた。災害支援の状況ではOTやリハ専門職の枠を超えたり、また全く関係ないことも必要であるということ。
- ・ボランティアに行った期間が災害から1か月半で、現地の状態に圧倒されました。通れる道路が限られていたり、その道路も潮位によって水没したり、交通が本当に大切だと思いました。自分の住んでいる地域だったらどうなんだろうと考えました。
- ・どのような環境であっても、より適応できるよう生活を支えることがOTとして重要と考えました。
- ・OTを知ってもらうには、OTが出来ることをアピールするだけではダメ。OTでは出来ないこと、力不足な所、完璧な職種ではないことを自覚することが大切。その上で、他の職種と足りない所を補い合うことで協業し、一つのことを成し遂げられると学んだこと。
- ・避難所立ち上げに参加し、生活を支えるOTだからこそ多くの視点にたって支援できることが沢山あるということ。他の団体の方々と協力し、自分たちで活動の流れを作り、それぞれの得意分野のアイデア、支援を出し合えたこと。また、OT仲間と協力し合えたことが自分の力となった。長期的、短期的支援を念頭に同時進行することは、普段のOTとかわらないこと。「生活を維持する最低限の段階」から「リラックスして過ごす（余暇）、毎日の活動役割を果たす段階」に移行するため、その両方を支援することができたこと。

- ・OTとしてボランティア参加を希望していたので、常に"OTとして"が考えを狭くすることもあり、逆にどんなことでもOTらしい関わりができたり、両方経験。肩ヒジ張らないで、OTとは、を忘れなければOTアプローチができるような気がした。
- ・体制の整わない状況下からのスタートを経験することができ、他職種との連携を取り合う必要性を感じ、また他職種同士がそれを同時に感じたため、職場以上に良く連携を取ることができ、その大切さを知った。また、災害時にOTは必要と感じた。災害によって失われた安定した生活の再構築のために何をすべきか、と考えることは、OTの得意とすることであり、今後も災害時には積極的に活動すべきと思った。
- ・疾患をみるのではなく、生活、人生をみる!!
- ・例えば精神科の「スペシャリスト」であることも大事だが「ジェネラリスト」であれば、こういう時何でもお役に立てるのだから、自分のあらゆる知見を深めることが必要と更に思った。
- ・体制が確立されていない中でリハ専門職、特に私たちOTにできることは少ないということ。災害時指揮を取る人、責任の所在が確立されていれば・・・他職種、他団体との連携がしっかりされていれば・・・と、ボランティア団体同士が主導権競いをしているような様子もみられ、基本は現地内責任者、団体がメインで動けるような連携体制をどのようにつくるのが大切と感じました。それでも宮城県士会スタッフの方には、来てくれたことだけでも感謝とさせていただき、被災地のことを忘れず生活をしようと思いました。
- ・対象者の方にとっては、リハビリの人、ボランティアの人なのだろうけれど、作業療法士として何ができるのかを考えていた一週間だった。ボランティア活動で出会った宮城県のOTより、一番大切なのは「関わること」であると教えられた。医療的知識や機能訓練、アセスメント能力等は大変重要だが、それは手段。OTとしてできることはやはり、相手の心をゆさぶる関わりにあるのではないかと考えている。
- ・生活とは、①ADL、②役割（仕事）、③遊び、④人間関係、⑤休養がバランス良く存在することだと思っています。その全てが失われた街、人々に対して、まずは①が充実されることが求められ、次に生活に足りないものを刻々と補う援助が必要なのだと考えました。日々の診療の中でも、この5つが存在できるような視点で臨めるようになったと思います。

《H23年5月》岩手県派遣

- ・災害時ということだけでなく、日常から人、他職種、地域に貢献し信頼されているかどうか、災害活動の期待にかかわると学んだ。1人の作業療法士としてで

きることを増やすだけでなく、日ごろから地域に貢献することを意識するようになりました。

- ・自分が今まで培ったものは、他施設、他領域であっても通用するものがあること。何より作業療法士という専門職として提供できるものがあることを知りました。
- ・その場で解決しなければならないことが多く、経験をフルに活用した時間でしたので、日ごろの業務も適宜スピーディーに涉るようにしなければならぬと反省することが多かったです。
- ・生活支援。OTは生活支援に強いはず。住宅、精神、身体全般含めたADLへのアプローチ。さんざん悩んだが、やり遂げて自分のOTに対する見つめ直しになり、自信につながった。
- ・OTとして学んだことよりも私個人の人間力が試されていると思った。とにかく、現場ではやれることをやろうと努める姿勢が備わった。
- ・人の気持ちに寄り添うこと。さりげなく背中をそっと押すこと。
- ・平時より災害時にOTが何を行うべきか行えるかを自分だけでなく、家族、同僚、メディカルスタッフが考えておくこと
- ・自分がこれまで経験したこと以上のことはできない。避難所ではOT的な介入は必要。避難所では、避難所を担当している保健師と連携が非常に大事だとわかりました。ボランティアをまとめるコーディネーターは必要。次の隊につなげる連絡システムが大事。

《H23年6月～7月》岩手県派遣

- ・何ができたかのアウトカムは全員の力が集結して時間差で訪れるものであり、即時効果はどんな姿勢で取り組んだか、という心持ち、方針、方法、過程であるとした。アウトカムよりまずはプロセスを大事にしたいと学んだ。複数、他職種での連携の大切さ、成せることの大きさを知った。
- ・OTだからこそできる支援がある。
- ・価値観も変化するものでした。又、OTでなく、一般ボラで伺ったことでOT支援のあり方も考えるものがあつた。
- ・自分のできることは小さなことですが、現地の方たちコーディネーターの方、保健師の方たちなど連携を上手にとることで、OTとしても幅広い活動ができると思いました。その大切さも。
- ・病院での勤務では他職種に判断を任せることも多いが、1人で心身状態を判断し、迅速に対応する重要性を学んだ。
- ・職場では丁寧に評価して、じっくり患者様にアプローチができ、それなりにDrからの情報も入るのですが、災害現場での活動は限られた情報の中で、短時間のアプローチ、そして次回来るボランティアに引

き継ぐという、今まで体験したことがないリハ、援助だったと思います。そんな経験をしてタフさが身についたと思います。一方で終わってみると「あの方へはあのアプローチでよかったのか」「もっと出来たことがあったのでは」と反省する面もありました。自分が現状、精神分野で働いていたので「ボランティアに行ってよいのか」と思ったことはありました。結果的に時間が経ち、この経験を踏まえて、より技術を高めようと前向きな気持ちになりました。

- ・他職種との連携の大切さ。
- ・与えられた仕事をこなすだけでなく、自分のできることを自分で見つけていく。
- ・震災発生から4ヶ月後までの支援の経過について知ることができた。提供した杖を使用していないことがあった。対象者が環境に応じて工夫して行動していた。対象者が介護保険の申請をすすめられたが、認定調査になるとその必要がないと本人に言われることが多いようだった。仮設住宅の家屋調査の必要性を感じた。
- ・対象となった方の経緯を聞かせていただいて、環境がそろわなくても「回復」していたことに改めて人間が備わっている力というものを感じた。私たちの仕事はその回復力をいかにひきだせるかということだと感じた。
- ・OTというアイデンティティを持ち合わせた自分に何ができるのかと考えるきっかけになった。
- ・自分が助けてあげたいと思っていたが、その考えはおこがましいというか自分の無力さを感じました。また、それとともに自分に何ができるか、違う視点で考えようとするようになりました。

《H23年6月～9月》宮城県派遣

- ・色々な場面で対応できないとダメだなと思いました。また、その場で治療、その場で改善が求められることもあるため、速さと実行力、効果がすぐ出せる力は必要だと思いました。
- ・現地の方たち、患者さん、全ての方々のお考えや生活、生の声をきけたことがこれからいきると思います。
- ・瓦礫の中の高台というような想像を絶する光景の中に住む方を訪れることが多かったが、その中で自身の状況より遠方からのボランティアを気遣って下さる方が殆どで、東北の人の優しさを感じるとともに非日常であることを強く感じた。時間をかけて話をしたり、複数回伺ったお宅では、日常を感じられる場面もあり、そういった日常をひき出す作業がOTとして必要な作業であると再認識した。自分自身は病院勤務なので、在宅訪問の重要性を改めて感じた。
- ・普段の仕事がいかに法律などにもとづいて自らの立場があるのかがわかった。情報が十分ないなかで対

象者から必要な情報を得ることはとても技術のいることだと思った。

- ・その場限りに終わらず関わり続けることが大切（次の支援者につなぐ）。
- ・いつもしていること以上のことはできない。経験していないことは難しい。環境調整や自助具などでもできることもある。自助具は今のようには既製品がない時に先輩方がしていたこと、ケースに合わせて自分が作ったことがボラに役に立った。OTとして普段していることは災害ボラでも活かせることがわかった。1番は当たり前の生活、仕事ができること、ケースが病院にくること、どれだけ幸せで恵まれていることかが理解できた。
- ・災害時リハ支援の必要性を知ったこと。支援体制の構築が必要であるとしたこと。平時にできていないことは非常時に行えないこと。地域性がリハ対応に大きく影響するということ。ボランティア、現地コーディネーター、後方支援コーディネーターの役割、ボランティアの姿勢、などなど沢山あってまとまりません。
- ・県士会担当者や現地スタッフ、他ボランティアから、OTや支援者として支援を行う心構えのようなものを学びました（県士会担当者の負担が心身共に大きいように感じました）。どんな活動でも同じですが、スタッフや対象者の方など、様々な人との出会いで、OTの幅が広げられたと思います。
- ・①作業すること→不健康を改善する、と改めて実感しました。②関心を示すという他者の行為が与えられる安心感が大切だとわかりました。
- ・震災後、臥床されていたために廃用や褥創になった方が多くいたとのお話をお聞きしました。震災っている人の力を超えた中でも自分たちの行える役割がそこにはあって臨床においても私達にはたす役割の重要性を改めて感じました。
- ・同じような仮設住宅、福祉用具でも障害特性や個性によって、その必要度は様々であり、それを専門的に評価する職種であると再認識した（日常的に福祉用具に多く関わっていなかったため）。この回では、行政の活動の一端を担った。生活場面での困難が生じた際にOTが行政から必要とされるよう、日ごろより役割を認識してもらえる働きが重要と感じた。自分自身がOTとしてまだまだ未熟であると学んだ。
- ・災害支援ボランティア活動に限ったことではないですが、スタッフや対象者の方など様々な人との出会いでOTとしての幅が広げられたと思います。

《H23年11月～H24年2月》福島県派遣

- ・福島県の地域の現状を災害前の様子もお聞きし、知ることができた。福島県士会の方々の良き働きを学

ぶことができた。

- ・他の地域でのリハ状況を見ることができた。
- ・特別支援学級での支援を通じてOTの視点で子供を理解すること、教育現場での子供を理解することの協業が行えた。教員への支援役として教育現場に関わることができた。
- ・人の生活が災害によって崩れるということを学びました。それは一週間過ごして一緒にいて、感じることでした。メディアからだけでは想像つかない状況を少しでも見られ、その場にいらさせてもらったことが最大の学びです。
- ・住居、家庭、コミュニティが壊れ、バラバラになった中での再構築、試行についてOTがどのように関わられるのか。
- ・今まで関わりが薄かった「予防事業」にセラピストが関わる有効性をみた。
- ・仮設のサロンでは、場の力や集団の持つ力が意図せずとも自ら働いて、人を支えて元気になっていると、感じました。逆にそれを作る利用者個人の力も実感しました。サロン活動では健康体操やレクでもありましたが、目的は避難生活者が健康に暮らすことや、孤立化を防ぐことであると思います。作業することで元気になるという作業療法は、この地でもっと保健行政に関わるべきだと思います。
- ・集団に対しての活動が学びとなった。
- ・阪神淡路大震災のボランティア体験で「普段できることしか災害時ではできない」と思い知った。今回、南相馬では原発問題もあり「普段」ではなくなっていた。その点は阪神淡路や中越などに大きく違うところである。Q28にも共通するが、全く同じ災害後の取り組みはない。
- ・地域のコミュニティの崩壊が対象者に与える影響として生活不活発病は我々が日常から重点を置かねばならないと感じ、学びとなった。
- ・南相馬の支援に関しては集団の活動が多かった。個別でのかかわりが業務上多かったので集団での介入について勉強になった。
- ・人は一人では生きていけないということ。人は作業をすることでおちつき、傷が癒え、笑顔になっていくきっかけをもつことができるということ。作業がひととひとをつなぐことができるということ。OTという人間自身も治療の道具なのではということを実感したこと。
- ・現地を知れる。自分自身を振り返れる。自分の力が分かる。

《H24年3月～H25年2月》福島県派遣

- ・「地域」「作業」を奪われた被災者の方々の生活を感じることで、リハビリテーションの基礎を学ぶことができました。人間の強さ、徐々に生活を再建する

背中をみることで、OTのできることは未知数だと感じました。

- ・交流。自分ができることはちっぽけだった。
- ・自分自身の弱さ、もろさの再確認
- ・人とのつながりが生きる上で大きな力を与えたり、ダメージにもなることを目の当たりにした経験でした。お会いした方々とお話し、心の変化をうかがう中でその力の源は人の存在であり、自分がどのような距離で関わりどの言葉を発するか治療自身の活用を考え、悩みました。また、生活の評価、精神活動の評価ができる、生活動作への介入、作業活動の導入、目標の引き出しができる、作業療法士はとても必要な存在であり、そのスキルをもっともっと磨き、たくさんの引き出しを持たなければ、と強く思いました。
- ・まず、このような事実があった事、あっている事を認識できた。自身にもこのような災害があった場合の心構えができた。
- ・何でもない日常の繰り返しが大切であることを再確認した。
- ・まずは相手に寄り添い、相手の暮らし、価値観、人となりを把握することが重要であることを強く感じました。
- ・現地で既にボランティア支援として行われていた大学の先生たちのノウハウを逆に勉強させていただいた。
- ・支援者の支援の意味が分かった。現地で頑張っている人たちに希望を持ってもらえるようなかわりが大切で、OTとしても活動を通して力になれることが分かった。

Q30 これから災害支援ボランティアに行く人に向けての助言については、現地の人に迷惑かけない（自分の健康管理を含め）、現地の方たちと情報共有し長期的な視点で対象者の方と関わりを持つことが大切、必要以上に介入を行わず、現場の方の自立を後からサポートする位の気持ちで取り組むこと、OTをやることも重要だが1人の人として色々な援助をすることはもっと重要、との意見があった。福島県では地域を知ることの重要性についての意見があった。

《H23年4月～5月》宮城県派遣

- ・勝手な行動や発言が、全体の信用を失うことがあります。OTとしての知識や経験が生かせそうなこともあります。生かせるかどうかはその場でなければ分かりません。提案はしても、判断は現地の方に委ねること。
- ・車の運転はできた方がよい（自分はしなかったのに機能力に欠けた）。"ムシが嫌い""大の清潔好き"は苦勞するかも（ボラの宿泊所で）。

- ・黒子に徹して自分が「何かをしに行く」と力まない、自給自足、すべて自分で持ち込む、不用意に物をあげたりしない、文化・風習の準備を、地図を頭に入れる。
- ・さまざまな活動があるので、参加するものがどんな活動をするものか事前にしっかり下調べをすると良い、OTとして参加したのにOTらしい活動ができなかった…、体力的に大丈夫と思ったら辛かった…、活動後に「さんざんだった」という感想をもつと再訪問する気持ちになれないし、他の人に勧める気持ちにもなれないので。
- ・避難所では、住民の方のストレスとならないような動きをすること、挨拶をして、じろじろ見ない、傾聴する、考えすぎないで、まずは行ってみる。領域（専門）に関わらず、国家試験を合格したOTなら、現地でできることはたくさんあるので気になったら行動をする、何か成果を出そうと思わないこと、自分が行ったことによる意義を追い求めないこと。
- ・情報の共有、勝手な行動はしないで、今すべきことを全力で対応すること、感情移入しないこと、参加する前は、現地の情報（生活面含む）をできるだけ集めていくことが大切です。
- ・活動場所とボランティアの生活拠点が異なる場合、持ち物など冷静に判断すべき。
- ・もともと花粉症の症状がありましたが、現地では症状が強く出ました。ボランティアに行ったら一番大切なことは健康であることだと思います。マスクや薬、コンタクトの人は眼鏡も持っていくなどの準備は必要だと思います。
- ・まず、OTであることを一時忘れて、一人の人間として現地の人に寄り添う心で行くこと、OTの専門性をアピールしすぎない。毎日、必ず仲間とミーティングをする。手ごたえを感じなくてもいい。最高のパフォーマンスを残さなくてもよい。地味なことをするだけでも十分役に立っています。
- ・現地情報の収集をできる限りすること（交通手段、被害状況など）。一緒に活動する人の得意分野を知り、協力すること。廃材やダンボールなど手に入るもので道具を作る（机、多くの人用のくつ箱、パーテーション、ベッドなど）。現地の支援者や被災者は、我々の姿や変化していく毎日を見て感じて元気をとりもどしている。希望をもってもらえるよう気持ちよく皆さんに接するよう心がける。
- ・「何かしなくちゃ」の考えは置いていくこと。2度目の派遣では、片付け、撤去が私の主な仕事でした。そのことを忘れないように動いたつもりですが、他からの派遣されたOTには「何しにきたの?」と言われたくらいですが、それで良かったと思っています。彼女たちの身体機能アプローチは立派でしたが、そ

の後はどうなるのでしょうか。片づけした備品等からも"思いやり"が感じられました。誰の為のボランティア??

- ・職種を問わず協働すること。些細なことでも話し合うこと。置かれている状況（被災者・支援者・支援地の過去・現在・未来予想）を把握し、OTがすべきことを考え、実行すること。ボランティアの担当者は次々と変わるため、後に残る資料を分かりやすく明確に残すこと。
- ・OT的なことをしなくてはい!!と焦ると思うけど、「今」の対象者には何が1番必要か考えること。例）この避難所には2時間しかない・・・グルッとラウンドして話したそうな人、困ってそうな人を見て、津波で息子さんを亡くしたおばあさんの話を聞いて一緒に泣く、元気いっぱいの子供の相手ができないお母さんに声かけて子供と一緒に散歩に出たり遊んだりして母に休憩してもらおう。
- ・できるだけ1週間くらいの単位で長めに行った方が自分も受け入れ側もラクだと思う。
- ・ボランティアに指示をする責任者を事前に明確にし、内容と目的を把握すること（私が伺った時期は難しく、「現地で柔軟に対応を」で仕方がなかったと思いますが、現状では可能かと）。
- ・思い切って出向けば、やれることはいっぱいあるし、仲間にも出会える。災害直後の風景も、そこで出会った人達、もがいた自分が鮮明に記憶に残っている。これは一生の財産だと思う。
- ・渋滞がすごいです。カーナビが使えないので、地図を持っていた方が良い。精神的にも負荷のかかる面があるので、話し合える相手がいると良い。

《H23年5月》岩手県派遣

- ・派遣先の情報を可能な限り入手しておくことが必要です。また、現地に入ってから避難所の雰囲気や細かなルールなど様々なので、柔軟な対応が求められます。自分が何かを示すビブスなどあれば、現地の人にも安心して活動を受け入れてもらえます。
- ・自分たちが「お客様」で、何をするかは現地の指導に従う「コマ」であることを自覚する必要があると思います。具体的には朝のボランティア渋滞に合わないよう早く現場入りする。何か提供する時（自助具）は現地スタッフが継続して関われる場合のみとする。避難所によりルールが異なるので、その場に応じて話を通す相手、関わり方の方法を柔軟にする。
- ・既に忘れがちになっていますが、まだまだ人の手は必要だと思います。できることは自分なりに行えばよいと思います。
- ・頭を柔軟な対応として基礎が重要
- ・必ず、グループで行動。携帯電話必須。タイヤ交換

できるように、地図とナビがあればよい、現金をもっておく、

- ・OTとして、役立つのは一部だけ、必要以上に関わろうとしない、(ボラ依存にさせない)、自分ひとりで解決しない、チームとして次のOTに任せること、
- ・必要以上に介入を行わず、現場の方の自立を後からサポートする位の気持ちで取り組むこと、
- ・日々、臨床でいろんな経験をしてください、本や研修へ参加して自己研鑽してください、自分の持っている能力以上のことはできません、

《H23年6月～7月》岩手県派遣

- ・体調管理を万全にする、共感が良いが、あくまで外部の人間であることを自覚して行動する、他職種、複数の人といつでも連絡が取れるようにしておく、誰でもできるわけではなく、OTとしても人間的にもスキルが問われる場面があるという覚悟が必要、継続して支援していく地元の力を取り戻していくための手段を考えておく、
- ・参加した人が異なればできる支援は変わります、まずは、主体的に取り組むこと、現地の人への連絡、相談、報告することで支援活動はうまくいく、
- ・持ち物：ポカリやカロリーメイトなどの少ない食糧とランプ、新聞紙やビニール袋、車で行くならスペアタイヤ、修理できるもの、
- ・個人の知識やスキルを出すのではなく、現地の方たちと連携し長期的な視点で対象者の方と関わりを持つことが大切です、そのうえで、自分に何ができるかと自信をなくすのではなく、できることがあるはずなので、何かしらの形で参加できるといいと思います、
- ・医学知識を持ち、全身状態の確認が、少ない器材で行えること、
- ・車で行くのであれば、役に立ちそうなものは、とりあえず何でも持っていくと良いかと思います、時として工具などは必要になることがありました、活動の中で楽しみを見つけることは大切だと思います、オンとオフの切り替えは必要でオフの時は現地の名物、遠野ではジンギスカンを食べました、活動中は緊張することも多いので、活動時間外は羽を伸ばすことも大切かと思っています、
- ・この場所では、当然だが、治療よりも支援が求められる、地域でのOTの役割の重要性に気付くと同時に、1人ではできることの限界も感じた、相談する、報告する事はとてもスキルが必要で、普段から意識して取り組むと役に立つと思います、
- ・災害支援は決まった支援を行うわけではないので、その場、その場での工夫を考えながら行っていくことが必要、
- ・コーディネーターからの申し送りや以前のOTボラ

の活動報告にしっかり目を通す必要がある、

- ・時期によって必要とされていることは異なる、いつも以上に報告、連絡、相談を、現地の人たちの意見を聞く、
- ・人の生死について、死をどうやって受け止めるのかなど心のケアを事前に考えておく、
- ・柔軟に対応できたらいいと思います、本当に瓦礫拾いとか踏み台とか歩行介助の杖とか持って行けたりするといいのかもしれませんが、すぐに渡せる状態、即対応して問題が解決できると当人さんに喜ばれると思いました、

《H23年6月～9月》宮城県派遣

- ・ルールは守ること、遊びや観光で行っているのではないので、自分の身は自分で守る、現地の人に迷惑をかけない、日頃から地域、現場で働ける力を身につけておく方がいいかと思います、
- ・できるだけ多くの必要と予想される道具（スプリント材やその他の材料）をもっていき、すぐに作製、実践できることがより支援になるように思いました、
- ・満潮時刻、余震時の避難場所の確認、現地スタッフも被災者であるということをよく認識すること、
- ・安全第一を心がけることだと思います、
- ・可能であれば、支援対象者の状況、ボランティアの役割などを前任者から聞いておく（短時間であればとくに）、
- ・健康管理は絶対必要、食べる、寝る、風呂に入る、当たり前のことができると安定します、寝つきが悪いなどある人は服用するのも手かと、睡眠不足は×、ボラ近く、宿泊近くの店の情報、特にホームセンターの場所は把握しておいてよかったです、急な買出しの時に助かります、ボラ前後に温泉、観光するなどするとその土地の暮らし生活がわかりよいです、それも支援につながるし、自分へのご褒美になります、ボラの前後に情報収集できる仲間がいれば積極的に、又、職場の人への参加の前後しっかり挨拶を、
- ・自己管理（健康、経済、人間関係）、コミュニケーション能力、広い視点、正しい情報収集、判断能力、フットワークの軽さ&慎重さ、
- ・現地の人（県士会担当者、現地スタッフ、対象者、その他地元で生活している方々）に迷惑をかけないこと、求められていること（それが具体的であっても抽象的であっても）を行うこと、
- ・支援はすべて自己完結で行う（後任者に迷惑をかけない）、自ら仲間に入ろうとする対人スキル、柔軟性が必要、目の前で起こっていることに対応しつつ背景が想像できるとよいかも、
- ・福祉用具について全般的な知識を要する、

《H23年11月～H24年2月》福島県派遣

- ・現地にある素材で自励具や姿勢保持具を作るアイデ

アが必要です。

- ・福島では支援者の支援が大切です。どんなことでもいいから今やれていることをフィードバックしてあげることが一番求められる。
- ・自分は今までの枠組みでとらえ何かをするのではなく、そこにいる人たちが何を求めているのか考え、行動することが重要。そこにはそのやり方があるので押しつけや余計なお世話にならないように気を付けること。
- ・自らのADL確保、移動手段の確保
- ・コミュニケーションをはかるためのネタを考えていった方がよいと思います。
- ・南相馬市は災害復興の仕事で滞在されている方が多く、ホテル、旅館がとりにくい状況です。宿泊施設を持つ現地ボランティア団体もありますが、残念ながら排他的であったりすることもあります。社協関係は宿泊施設を持たないため、ボランティア自ら宿泊施設を探さねばなりません。はじめて参加される方は、現地との何らかのつながりを通して探してもらった方がよいと思います。
- ・現地スタッフへの分かりやすく伝えることが必要。
- ・とにかく行くこと。
- ・レクのアイデアは多く持っているといよい。道具を使ったり、体を使うレクは効果的。一時でも安らげる場の提供はとても重要。笑うことを念頭に置いたプログラム立案を。
- ・集団でレクをする時に喜んでもらえるような芸を持っているといいです。（歌とか楽器とか自分の地元のアピールできる芸など）
- ・熱意も大事だが、それだけであると何もできないという自分自身の落胆や、要請側も何をしてもらおうか、これを本当はしてもらいたいのだが言ってみてもよいのだろうか、といって余計な負担をかけてしまいかねない。求められているのはOTというプロであって、即戦力の人材だと感じた。そのためにOTとして様々な経験を積み、自分の中で自信をつけることが大切だと思う。迷ったり焦ったりする姿は被災者の不安を助長するのではないだろうか。OTであることもそうだが人間力も大切だと思う（笑顔でいる、元気にふるまう、同情する、言葉を選ぶ、など）。
- ・現地で求められていることは何か、を事前にもしくは活動中にも情報収集していく。

《H24年3月～H25年2月》福島県派遣

- ・被災地に滞在する期間が短いのであれば継続性の短い（単発的な）アプローチに留める。
- ・具体的な情報を得ていくこと。前任者に聞いておくこと。
- ・現地の情報収集をしてほしい。現地スタッフに負担

をかけない。自己完結型の支援をしてほしい。

- ・支援先の土地柄というか、元来の性質、特色を知っておくことも大切だと思います。自分の介入した結果を明確にし、残されている課題や予想される問題点を伝えておくことが必要です（自分たちは流れの一部分であることを認識すること）。
- ・出来るだけ共感するようにする。しかしあまりにも深入りすると自身の精神面も低下してしまう恐れがあるので注意して欲しい。
- ・地域の人たちの気質をキャッチして下さい。想像以上に喪失感が強く、深く傷つき、日々の生活にも疲れていた。多くの指示や期待をしない方がよい。支援者が疲れているので、地域の支援者を支えてあげてください。
- ・私も参加する前は「私が行って何ができるだろうか」と参加しようかしまいか迷っていました。いざ行ってみると今までの知識、知恵をわずかながら役立たせるところができたり、被災者の多くの方々と出会い、心のふれあいを通して精神的なサポートができたり、ほかのボランティアの方から刺激を受けパワーをもらったり、悩んだらとりあえず行ってみる!がよいのかな、と思いました。
- ・とにかく支援者をサポートするように心がけて、動き、流れをよくみること。よいところは積極的に伝えること。

Q31 災害支援ボランティアの心構えについては、Q30と同様の内容が多かった。柔軟な対応や現場の求めていることをやる、など、現場の負担にならないことを中心とした意見だった。

《H23年4月～5月》宮城県派遣

- ・「OTとして」と構えていかない。時期、場所によって活動内容が違う（情報の共有）。自分たちの経験は断片にすぎないこと（被災地は進行形である）。
- ・自分は、押しよせる多様、多量な支援ボラのコマと考え、数日しかいない者としての分をわきまえて行動すること。自分が「やりがい」を感じるかどうかはどうでもいいことです。現場の負担にならない。チーム内の交流を楽しむ、かな。
- ・即時、即対応。できることから始める、継続する。自分のやったこと、と手柄にしない。引き継ぐこと、伝えること。
- ・「被災者の気持ちを理解するのはむずかしい」と始めからわかって参加することだろう。被災地にいる間は悲惨な現場を目の当たりにして胸が痛んでいる自分がいても、自分には帰る家も職場も家族もいる。また、訪問の時期によっても被災者の方々の気持ちも変化していることを知って接するべきであろう。
- ・困っている人達を皆で気にかけて、住民の方がまず

望んでいることを人として（OTとしてではなく）提供すること。多くの方が、現場を一目見てみたら、「何かをしなくては・・・」と感じるものがあると思います。それは一方的なものではないかもしれませんが、まず現地にかけて「できることをする」ことではないかと考えました。そして、教訓にしていかなければならないと思います。次はどの地域に起こるかわかりません（起こらないでほしいと願っています）。

- ・自分のレベルにあった行動をすること。免許だけの行動は、相手に対しての押し付けにしかならない。現地の方の求めていることを知る姿勢からはじまる。
- ・柔軟な対応力を持つこと。
- ・何か手伝いたいという気持ちだけだと思います。
- ・臨機応変に必要なこと見極めて活動すること。
- ・何でもする心構え。イメージと違って、現地のニーズ、指示に従う。自身の身は自分で守る。一人でできることはほとんどない。仲間と一緒に知恵を出す。
- ・被災者、現地で支援活動をしている人の気持ちになって考えること。無理せず仲間と協力すること。可能な範囲で協力して情報収集し、最善をつくること。
- ・柔軟な思考。自分のことは自分で。
- ・皆と仲良く、その時その場に必要のことを考え、実行すること。
- ・「自分がしたいこと」と「被災者がしてほしいこと」を勘違いしないこと。かつ、過剰に介入しすぎないこと。又は、その土地にないハイレベルな技術でリハをするとその技術をもたない地元スタッフの自信や信頼をなくしたり、過負荷になるという心構えが必要。ヒーロー気分で行ってもね…。
- ・何でもやる、ということ。なんにでも自分を使ってください、という姿勢。"郷に入れば郷に従う"ということ。
- ・おしつけがましくならないこと。継続的に支援できる体制作りに協力すること。でしょうか？短期的すぎて分かりません。
- ・人として何ができるかなんだろうと思う。専門外のことでも雑用でも率先してする。どんなことをやってもOTはOTなのだから、存分ではなくても力は発揮できると思う。自分の力を信じよう。そうすれば何でもできそう。何かをやってやろう、変えよう、ではなく、ありのままの状況の中でいかに関わるか、できることは何か。やるのは、変わるのに関わった人達本人の力。その力にちょっと関わらせていただくという気持ち。
- ・あまり熱くならず、"人手"程度の認識を持つこと。やるべき事は現地にあります。

《H23年5月》岩手県派遣

- ・個人、あるいは個人的な作業療法士としての信念よ

りも災害ボランティアとしての責任、また派遣先のチームの目的を優先すること、そして、最後には被災地が自らの力で活動していけるように支援すること。ボランティアが現地の負担となったり、かき乱すことはあってはならない。

- ・柔軟であること。何か求められたら、すぐに対応すること。自分の思惑は外に置き、相手に求められたら対処できる余裕をもつこと。
- ・自分にできることを提供できること。自分を必要としている方に提供すること。何かを得ようとかしてあげようとか欲張らないこと。誠心誠意で対応すること。
- ・OTこそが災害支援に強いという気持ちと自分に对する自信と熱い思い。
- ・心構えは必要ない。時間に余裕があるひが行えばよく、無理に行く必要はない。
- ・なんでもしすぎると後々頼りすぎたり、依存傾向になってしまうので、必要に応じてボラから離れること。自分の専門性を押しつけすぎないこと。自分がいなくなった時のことも考えて行動すること。
- ・必要以上に介入を行わず、現場の方の自立を後からサポートする位の気持ちで取り組むこと。
- ・気持ちと行動そして連携。気持ちがないと行動できない。気持ちや行動が走りすぎても現地では空回りしてしまう。災害チームでの連携もとれなくなる。

《H23年6月～7月》岩手県派遣

- ・自身と他者との関係性をわきまえること。小さな一歩の積み重ねになるという意識を持つこと。
- ・現場の邪魔をしない。現地の判断を仰ぐこと。
- ・謙虚な心。ある程度の動き方、対象者への接し方含め自己判断できる心づもりでいること。
- ・単独行動ではなくどこかに所属すること（信頼・信用されるため）長期的な視点をもつこと。
- ・指示を待つのではなく、自分ですることを見つける。また、支援が限られた期間で終了することを前提に自己管理方法などを提示できるようにする。
- ・個人で援助するには限界があると感じました。チームに所属して、その場のみの援助ではなく、継続性を持った援助を心がける必要があると感じました。その際、統率者に報告を集約しつつ、臨機応変に対応する必要があると思います。また、このようなボランティアではスペシャリスト以上にジェネラリスト的な考えが大切と思いました。現地では様々な活動があり、様々なボランティアの方がいましたが、各々が尊重しあいながら活動するおらかな気持ちが必要と思いました。
- ・その地域や支援者の想いのもとで動く。
- ・被災者の立場になって活動し、何かしてあげようとするのではなく、一緒に何かしようとする。

- ・対象者に対して①自分が何を提供できるひとかをわかりやすく伝えることができる②自分ができることをその場で適切に提供できる、③自分ができないことをそれをできる人に伝えることができる④OTであることを認識して行動する必要がある。
- ・最終的には、その地域の方々が再びその地域で、医療、福祉を展開していけるための支援であることを念頭におく、自分に過信せず、特別なことをしようとせず、そこで必要とされることをいつも職場で行っているOTの流れのように考えて行動する。
- ・現実をしっかり受け止め、生きるためにどうすればよいかということを信念にとどめること。
- ・現場におられる人の気持ちによりそえるといいと思いました。少なくとも私は、自分の中のOTのイメージにとらわれていたので、対応するのが迅速ではなかったと思います。

《H23年6月～9月》宮城県派遣

- ・ルールは守ること。遊びや観光でいっているのではないので、自分の身は自分で守る。現地の人に迷惑をかけない。日頃から地域、現場で働ける力を身につけておく方がいいかと思います。ボランティアを行ってから日数が経ってしまい、思い出せないことが多いです。すみません。
- ・応用実践の力とお困りの方の生活を支える、支えたいという信念が必要だと思います。
- ・その場だけの支援ではいけないということ。南三陸では、リハボランティアが比較的充足、安定しており、震災前より充実したりハを無償で提供されている方も少なくなく、また、それに対し、今後現地だけでそれら同等のサービスをどう継続していくかが課題となっていた。そのため継続性を捉えた支援が必要と改めて感じた。
- ・何か手伝いたいという気持ちだけだと思います。
- ・対象者が必要としていることをする（OTだから、に囚われず）。
- ・Q30に関わるとありますが、現地の求めに対応すること。もしくは求められた要望に気付き対応すること。現地のスタッフ、ボラ（他団体）とコミュニケーションを取ること。一人で全てを行うのは無理。協力を得られるように自分から関わること。元気で挨拶、笑顔で対応。1人で突っ走らず周囲と協調しながら、できない事があっても落ち込まず（当たり前だから）できる事を探る。
- ・自己管理ができる。相手の立場に立って話を聞く、判断できる。誰のために行っているのか、常に自問自答する。
- ・現地の人々の邪魔にはならないこと。
- ・自己完結すること。他者（受け入れ側）に要求しない。

- ・ボランティアが迷惑をかけることにならないように、体力と物怖じしない心を持つこと。

《H23年11月～H24年2月》福島県派遣

- ・現地の人の訴えを親身に聴くことが大切。健康第一、自分の体調を崩さないよう気を付ける。
- ・自分一人で最大の支援をしようとしなくていいこと。現地の人々の声に耳を傾ける。
- ・周囲の状況を読み取ること。できることから始める。そこにいる人に話を聞く。
- ・よくわかりません。まずは行動でしょうか。
- ・お客様ではなく、自ら積極的に関わりを持っていくことが短期間では必要だと思います。こちらから話すだけでなく、相手の話を聞く必要でしょう。
- ・災害ボランティアもその時期によって求められる役割が異なります。大災害の直後は命令系統がはっきりしません。自ら積極的に現地で活動し、一方では他の支援者や行政とつながるようにシステムを作るイニシアティブが強く求められます。少し落ち着いてシステムができたらその傘下で活動するなら自分のやりたいことを主張するのではなく、現場が求める役割を果たす冷静さが必要です。当事者第一だと思います。若い方も年配の方も作業療法士は現地に赴いて、生活を立て直そうとしている被災者や支援者とともに働くといいと思います。日常とは違う生活を知ることから、生活とはなんなのかを学ぶことができるでしょう。またその人らしい作業の大切さがよくわかると思います。
- ・OTとして何か得る、学ぶという姿勢があればよい活動につながると思います。
- ・何でも自分からすること。周りにも声を（自分から）かけること。
- ・何でもやりますという気概。相手の立場に立つ思いやり。とにかく行動。専門性は二の次。
- ・要支援、介護者を増やさないようにすることを念頭に持つこと、と思います。
- ・常に相手の立場に立つこと。割り切りの気持ち（冷たさはいけませんが、思考をクールに保つ）。相手の前ではどっしり構える。
- ・あくまでボランティアということを忘れない。

《H24年3月～H25年2月》福島県派遣

- ・フットワークの軽さだと思います。理解の得にくい専門性をひけらかさず、笑顔で円滑に既存の支援の輪に乗れるような柔軟さが必要だと思います。
- ・自分の中でできることを知っておくこと。一回で完結する支援。迷惑をかけない。心をこめて。
- ・支援の内容にもよるかとおもいますが、まずは何かをしたいしてあげたい、よりはいかに寄り添えるか、共有・共感できるかが大切なことだと思いますので、自分自身の感性を研ぎ澄まして臨む、ことでしょう。

か。支援の方法、内容は様々であり答えもないと思います。

- ・お互い様の活動であるということ。現実と同じ目線でとらえて感じる。徐々に日々が過ぎることが、一歩、歩き出そうとする気持ちに向かうために必要なことを感じた
- ・自己満足の活動にしない。作業療法にこだわらない。
- ・目の前の人に対して支えとなること。状況をできるだけ早く理解してできることから始めること。求められてない支援はしないこと。

Q32 災害支援ボランティア後に行った活動については、震災関係研修会への参加、所属機関や都道府県学会、全国学会などでの報告、学術誌などへの投稿、現地への再訪問、その後の情報収集などが挙げられていた。また、協会ボランティア以外の活動を継続しているという意見もあった。その他、所属機関などで、自分の地域が被災した場合の対応の検討を行っている、という意見もあった。

4) まとめ

災害支援ボランティアの参加者を対象に、アンケート調査を実施した。

ボランティア登録から派遣までの流れについては、概ね適切だったと感じている参加者が多かった。協会派遣ボランティアの多くが一週間単位の活動であったことについても適切と感じている参加者が多かった。また、職場や家庭でも理解があったようだ。理解があったからこそボランティア参加できているとも考えられる。無償のボランティアであったことについては、賛成の答えが多かったが、長期的な活動の可能性を考えると課題があるのではないかという意見もあった。派遣決定から派遣までの間に行われた、協会もしくは被災地の士会からの情報提供については、適切であった、または、不適切でも仕方がない時期であった、との答えが大半を占めた。そのように、情報提供についての意見が震災直後のH23年4月でも半年後の9月でも同じような内容であったことから、今後の災害支援ボランティアについて考える際は、ボランティア参加者が求める情報とその必要性について検討することが求められるように思われた。また、情報発信・情報共有について、被災地の負担を減らすような方法の検討も必要であると思われた。

現地でのボランティア活動について、支援活動を行った場や活動の内容は、時期が経過するにつれて多岐に渡っていた。被災地の県士会担当者や現地コーディネーターによる支援活動に関する説明と指示については、大枠の説明と指示の下で自分で判断する場合も多いようだった。OT一人ひとりの適切な判断が求められている。移動について、被災地の不安定な道を運転するというのが大変だったとの意見が多かった。

災害支援ボランティア活動を経験して感じたことについては、様々な視点で様々な意見が寄せられた。その一つ一つが経験に基づく重みのあるものであり、今後の災害支援を検討していく中で、貴重な財産になると思われる。

3. 今後の課題

ボランティアへのアンケートおよび、ボランティア集会において寄せられた意見をもとに、今後の災害支援ボランティア活動における課題を考えると、以下の3点にまとめられる。

1) 情報提供する内容と情報発信手段の検討

ボランティアに対して派遣前までに行った情報提供については、適切、あるいは当時の状況を考慮すると適切というような意見が大半を占める一方で、情報がもっと欲しかったとの意見も寄せられた。刻一刻と状況が変化する中では、被災地に関する正確な情報を得ることは難しく、情報が少ないのは当然ではあったようだが、特に、ライフラインや生活事情についての情報は、現地コーディネーターや前任のボランティアの情報などをもとにしながら、提供する体制づくりが必要であると考えられる。

また一方で、ボランティア活動内容を報告する機会を作ることも必要であると考えられる。これは、ボランティアがどういった活動を行っていたのか事前に把握できず不安だったという事例や、職場や家族の理解を得るのに苦労したという事例において、活用できたのではないかと考えられる。

情報発信の手段について、今回は、協会担当者とのメールのやり取りのみであったが、今後は協会ホームページでの情報提供や、掲示板などでリアルタイムに情報を掲載・更新できるシステム作りが必要であると考えられる。

2) 後方支援のあり方の検討

災害支援においては、直接支援のみならず、関係各機関との情報共有や連絡調整といった、後方支援が不可欠で、重要な役割といえる。一方で、後方支援を担当する現地コーディネーターが、通常業務を行いながらの非常に多忙な中で活動を行っていたため、負担となっていたという状況がある。

これらの負担を軽減するために、後方支援業務についても、業務を分散する、専任のスタッフを現地へ派遣する、一部をボランティアが担うなどの対策が必要であると考えられる。また、前述した、情報発信手段によっても負担が軽減されることが考えられる。

3) 平時からの支援体制づくり

災害支援においては、平時からの連携体制が重要という意見が多く寄せられた。これは、災害支援活動をするにあたっての現地関係各機関と各都道府県士会とのネットワーク、各都道府県士会と協会とのネットワーク、協会と派遣ボランティアとのネットワークがあげられる。それぞれにおいて、平時からの連携体制はもとより、災害時の支援体制についても構築しておく必要があると考えられる。またそれらを広報し、関係機関ならびに協会員にも周知しておいてもらうことも重要である。